農民(NOUMIN)が三国乱世を行く(ただし恋姫)

ぱっくまん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

三国志にＮＯＵＭＩＮ放り込んでみた（ただし恋姫）

目次

農民ウィルダーネス ―― 1
農民エンカウント ―― 9
農民エンプロイメント ―― 16
農民ウォークアラウンド ―― 29
農民ミスアンダーストウド ―― 39
農民ソークトゥ ―― 47
農民ブリッツ ―― 56
農民トワイライト ―― 67

農民ウィルダーネス

「まったく面妖よなぁ」
ある日、ある場所。
乾いた大地に一人の男が佇んでいた。
端正な顔立ちの男である。
紺色の陣羽織を身に纏い、長い群青色の髪を後ろで纏めているその姿は、流浪人の雰囲気を漂わせているが、しかし同時にどこか雅な空気をも感じさせる佇まいであった。
その背に背負う刀は、比べれば通常のそれより長いことがわかる。それがまた、この男の独特な雰囲気に一役買っているのだろう。
おおよそこのような場所には似合わない男だ。見る者が見れば、和を体現してるような印象を抱くであろうその者は、首を捻り独りごちる。
「いやはや……私もそれなりにこういう場数を踏んできたつもりではあるが、流石に今回ばかりは理解が及ばぬな」
そうして男は上方へ視線を向ける。そこには昇りきった太陽が、その陽光を惜しげもなく振りまき荒野を照らしている。
「ふうむ、最期に見たのは確か、石段から見た、げに美しき月だった筈なのだが……」
だが、月は沈み太陽が顔をみせ、あたりを見れば当然とばかりに石段などなく、見渡す限りの荒野のみ。
なんだこれはと困惑するのも無理はない状況だ。
男は少しばかり回想する。
自分の参加した戦い。自分が、”佐々木小次郎”として剣を振るったあの戦を。
すなわち、聖杯戦争を。
「キャスターである女狐めに門番をさせられ、その後セイバーとの死合いに敗れたのは憶えているのだが――」
それから。

自身は消えた筈。
英霊に及ばぬただの亡霊なれど、聖杯の思し召しか、最期に好敵手と死合うことができた。それで自分は満足した、筈だった。
だが、現に自分はここに居る。
負けて、消えた。それで終わりな筈であった。
かと思えば今、大地に両の足で立ち、斬られた筈の傷は跡形もない。
しかも、どういうわけか無いはずの心臓が打つ鼓動が聞こえる。
頭の片隅にあった知識を掘り起こすと一つの事柄が思い浮かぶ。
これは、
「受肉、というやつか」
あり得る要因を引っ張りだし、そう当たりをつける。しかし、何故自分が受肉しているのかという心当たりはない。
原因がわからないことに加え己の体に起きたありえぬ現象。思い当たる節といえば――
「十中八九、聖杯の仕業であろうなぁ」
まぁ。
思い返せばあの時聖杯もおかしくなっていた事だ。
元々がイレギュラーであった自分。現界の為に少々無理をしたことだし、座に帰される時に何が起こってもおかしくはない、と考える。
その後息もつかぬほどの間隔で召喚された、という可能性もある。もしくは座にて見ているただの夢かのどちらかだが。
「まぁ、それは聖杯戦争も同じであったか。あれも夢であったなら、これもまた夢として楽しむのも一興、か」
うむ、と一つ頷き、早々にこの状況に対しての思考をやめる。
こういうのを考察するのは女狐やらの魔術師のがする事だ。刀を振るしか能のない自分では、いつまでたっても答えには辿り着かぬだろう。
そも、新たな聖杯戦争にしては、依り代もなければ魔法陣もない。ましてやマスターらしき人間も近くにいない。この可能性は除外していいだろう。

そうと決まれば次、自分はこの夢かうつつかもわからぬ世界でどう行動するか、という思考に移るが、
「そもそも、どこなのだろうなぁ此処は」
日差しを遮る建造物はおろか、木々もなく草も枯れ草のみ。風情が感じられないと嘆きを覚えるばかりである。
「見えるものが柳洞寺であれば、もう少しわかりやすかったのだがーーとにかく歩いてみるとしよう」
顎に手をやり、ううむと唸るがわからない事はわからない。野たれ死ぬのはごめんだし、人を探して聞いた方がよいだろう。
思考に区切りをつけ、町村がなくともせめて山があればいいのだが、と歩き始めた。

◇

歩き始めてしばらく、暑さと日差しに汗を流し、不快感に顔を顰める。
――魔力供給が要らないのは楽ではあるが、こういったところは不便よな。
ふう、と息を吐き、額の汗を拭う。
疲れこそ微々たるものだが、いかんせん単調な行動というものは気力をも奪う。
「やれやれ、そろそろ村かなにかの影くらい見えてもいいものだが……おや？」
天がその声を聞き入れたのか、何やら遠くの方に人影が見える。
遠目ながらも何やら数人で揉めているように見える。
普段であるならばそんな渦中に入らぬよう避けるのだが、まぁ、背に腹は変えられないだろう。一応様子見のために気配を消して近づく事にした。
「――だから、何度も言わせんじゃねえよ！　身包みおいていけば命だけは取らねえっつってんだろ！」
――ああ、これはまたありきたりな場面よな。

近づいたことで聞こえてきた声はそんな感想を抱かせた。
「そ、そんな。この荷を届けられなかったら儂等はおしまいです。どうか、どうか――」
「知らねえよんなことは！　優しくしてりゃつけ上がりやがって！」
見れば、百姓らしき身なりをした者が、これまた盗賊と一目でわかるような連中に囲まれていた。
遠目で見たより幾分か数は多く、その囲んでいる顔は下種の類であると判別できる。
気になるのは、全員が黄色い布を身体のどこかしらに身につけている事だろうか。
しかし、罵声を浴びせておいて優しくしている、と言えるのはいっそ尊敬するべきだろうか。
優しさってなんだろう。拙者わかんなくなってきちゃった。
助けに入っても良いのだが、この身は英霊ならぬ亡霊の身。名の知れた、其れこそかの騎士王なら脇目も振らずに助けに向かっただろう。
しかし現状通りすがっただけの自分に別段、あの農民と思わしき者に善行を行う義理は無く、別にあそこに入って厄介事を抱える必要もないだろう。道を聞くなら、狩りを終えて油断している奴らを斬り伏せ、脅し、聞く方が容易だ。
だが、
「見て見ぬふり、というのもなんとも好みではない故な」
助ける義理はない。だが、助けぬ道理もない。
まぁ。なんだ。理由をつけるなら、生前百姓であった自分としては見逃す訳もないよなぁ、といったところか。
近寄って声を出した事で、恐喝を行っていた山賊が驚きを顔に貼り付け此方に振り返る。
「な、なんだてめえは!?　いつからそこにいやがった!?」
「いやなに、つい先程よ。それよりほら、そこな者も困っておる。嫌がらせもそこまでにしておいた方が身のためだぞ」
「ああ!?　なにをわけわかんねえことを……！　てめえこそどうなる

かわかってんのか!?」
「相手の力量も見極められぬなら喧嘩を売らぬことだな。――弱く見えるぞ」
「ああ?」
挑発を交えて言うと、散々吠え立てていた男が静かになり顔つきを変える。
言い負けて、そのままという性格ではないのは見ればすぐわかる。だからこの沈黙は、
此方を殺す、と決めたソレだ。
なるほど、この程度の人間がこの顔つきをできるということは、どうやらこの世界は武が身近らしい。少しばかり、心が躍った。
男は静かに、そしてさりげなく手を挙げる。それを見た周囲の者は次々と武器を構えていく。
男も自身の武器を抜くと、下卑た笑いを浮かべた。
「命知らずが……首取って、すぐに獣の餌にしてやるよ」
「ふむ。気の短い男よ。そんなに急いていては落し物をしても気づかぬようだろう」
「ああ? 何言って――」
それが男の最後の言葉であった。
ゴトリ、と土に硬い物が落ちた音が聞こえ、それに続くように男の身体が崩れ落ちる。死体には首がついていない。
何せ先にした音は、切り落とした首が地面に落ちた音なのだから。
「ほうら落し物だ。まぁ、聞こえておらんだろうが」
そう言って物干し竿を振り、剣速が少しばかり鈍ったせいでついた血を落とす。
ふむ、やはり、この長い刀身で抜刀術は向かぬか。
そう思いながら、ゆがみなく緩やかな曲線を描く相棒を見て、口が綻ぶ。
――もしこれが聖杯の仕業なら、とりあえず感謝せねばな。
「け、剣が見えなかったぞ」
「よ、妖術師か」

「怯むな！　数でかかりゃどうしようもねえ！」
「は、生憎だが不可視の剣などと二番煎じをするつもりは無くてな」
短く笑い、向かって来た賊に物干し竿を振るう。その数に応じて落ちていく首の数が増えていき、十数人はいたであろう賊も残り僅かになった。
途中から我先にと逃げ出す賊もいたが、生かしておいても仕方ないと首を落としておく。真っ先に逃げ出した三人組を逃したが、まぁ、あの程度の奴らなら大した悪事も働けまい。
「た、頼む。見逃してくれ」
周りの者がすっかり少なくなったのに気づいたのか、一人が武器を捨てそう言ってきた。
するとそれに続くように他の賊も武器を捨てていく。
「悪事を働かん、と誓えるなら見逃してやろう。すぐに破ってもよいぞ。もっとも、拙者が恐ろしくなければ、だが」
「ち、誓う！　真っ当に生きるようにする！　だ、だから！」
「なら、疾く去るがいい。あまり気の長い方でないのでな」
「はいいいいい！」
そう言って此方に背を向けて走り去っていく。
あまり期待はしていなかったが、やはり武人には遠く及ばない者たちであった、と、ため息をつきながらそう思う。あのような塵芥の命を取り続け、刀の錆にでもなられるのも堪らないので、見逃してやることにした。
まぁ、そう簡単に良き相手と出会える筈も無し、か。
世知辛いものだ。
「あ、あの」
「ん？」
声をかけられ、振り向くと先程囲まれていた農民の男が此方に頭を下げていた。
「貴方様のお陰で命も、積荷も奪われずに済みました。本当にありがとうございます」
「いやぁなに、其方も災難であったな」

刀を背負い直し、頭を上げさせる。
「お礼を差し上げたいところなのですが……なにぶん持ち合わせが無く」
「おや？　そこな積荷があるではないか」
そう意地悪気に言うと男は慌てて首を振り、
「こ、これは命の恩人といえど渡せません！　洛陽の董卓様への積荷なのです！」
「らくよう、とうたく」
はて、らくよう。察するに地名だが、もしや洛陽と書き、とうたくは董卓と書くのであろうか。
門番をしてた際、余りにも手持ち無沙汰な時は、聖杯の知識から歴史の英雄について思案し、耽っていた。
そして詳しい事は覚えてないが、確かその中には董卓という者もいた気がする。
なるほど、此処は明（みん）ということか。
ああいや、私の生きていた時代より前、となると俗に言う三国時代という奴か。
「あ、あの？」
「ん、ああ、いやすまなかった。つい考え事を、な」
「は、はぁ」
「それよりお主、その洛陽は近いのか？」
「え？　いや、まぁ、此処から三日ほどの距離です」
「おお。ならばそこまで同行させてもらってもよいか？　それが礼でよい」
「そりゃあ、貴方みたいな腕の立つ方なら大歓迎ですが……いいんですか？」
「なに、流浪の身でな。この辺りも漸く着いたばかりで地理もわからんと困っていたところよ」
はぁ、それなら、と男は了承の意を示し、早速とばかりに荷車を引き始めた。
その後ろを歩きながら、ふと、「でことらで運んだら楽だろうな」と

いう思考が浮かび、ふと消えた。なんだったのだろうか。

農民エンカウント

人。人。人。

見渡す限りの人の波に、道すがら栄えているとは聞いていたが、此処までとは思わなかったと小次郎は言葉に出さず感心する。

「それじゃあ、私はこれで」

「ああ、世話になった」

道中でなにがあるでもなく、洛陽に辿り着くと、そのまま荷を収めに行くと言う農民と別れ、さてどうするかと考えながら歩き始める。

人の流れに気ままに流されていると、広い通りに出た。

活気があり、呉服屋、本屋などが並んでいる。見れば、鍛冶を営んでいる店も見受けられた。

街中ということもあり、武器を背負っているものは見受けられず、しかし皆無というわけではなかった。

「恋どのー！　確かあちらに、それはもう美味しい饅頭の店があるとの噂ですぞ！　寄って帰りませぬか？」

「……ん」

そんな声がすれ違い様に聞こえ、そういえば自分も腹ごしらえをしてなかったと思う。

受肉というのもこれまた不便なものだとため息をつき、二人の少女達の後を追う。

……いや、やましい気持ちはない。可憐な乙女達だったというのももちろんあるが、そもそも何処に食堂があるのかすらわからない身である。手っ取り早く着いて行くほうが楽であろう。

後ろから眺めると、片方は戟を背負い、犬がその後ろをついて歩いている。

もう一人の方は幼く、それらしいものを持ち歩いていない。しかし利発な雰囲気を纏っている。

しかし、なんだ。この時代の漢というのは、随分と進んでいるのだろうか。

前の二人の服が、冬木の時ととそう変わらないというか、そういうのを通り越して眼福というか。
うむ。
うむ。
とりあえず、深く頷いておいた。

◇

ついて行くうちに、気づけば人気のない路地に入っていた。
隠れた名店、といったところだろうか。楽しみにしてただけある。
少女達が角を曲がり、自身もそれに続く。
その光景を見て口角が上がってしまう。
いやはや、なんとも。
当たり、だ。
「見た目が可憐でいても、あまり関係ないのはセイバーで学んでいてな。うむ、拙者は運がいい」
見れば路地の先で、武器を取り回せる最低限の広さがある空間を確保し、此方を向いている赤髪の少女。
その身から先ほどとは比べものにならない闘気を放っている。
それの後ろに視線をやると、ついていた犬と淡い緑の少女が物陰に隠れているのが見える。
なるほど、アレを潜り抜けて人質を取る、というのは無理だろう。
加え、此方が武器を振るうのには少々手狭。
純粋な武だけでなく、ランサーが得意であったという『げりら戦』も得意ということだろうか。もしくは青髪の少女の知恵か、だが。
どちらにしても、アサシンのクラスたる私の気配に気づいたのだ。
当たりに違いは無い。
「……誰？」
言葉少なく、しかし威圧感を多分に含ませ問うてくる少女。
叩きつけてくるその闘気が心地よく、つい頬が緩んだ。
「アサシンのサーヴァント、真名（しんめい）は佐々木小次郎」

愛刀を抜きながらそう返す。
この亡霊たる自分が、佐々木小次郎の皮を被る意味は既にない。
しかし、折角武人と相対しているというのに名乗る名が無い、ではあまりにも格好がつかないというものだ。
もっとも、サーヴァントのくだりは理解されぬだろうから端折ってもよかったかもしれない。
「しん、めい？　真名（まな）のこと？」
おや、と。
この時代には無いであろう言葉よりも、真名の方を気にして来るとは。
そして呼び方も違う。だが、なるほど。
「ここでも真名（しんめい）……ああいや、郷に入ってはという奴だ。拙者も真名（まな）と呼ぼう。真名は、なにか重要な意味を含むのであろうな」
「……？　真名は、神聖で、大事。常識」
さも当たり前のように常識と伝えてくる少女。知らない此方を疑問に思う様子を隠す気すらない。
暴露（バレ）るとまずい、という感じでは無い。
神聖、という言葉から察するに誇りに近い何か、もしくは認めた者しか呼んではいけない名、といったところか。
まぁ。なんにしろ。
なんでもよいか。
「うだうだ考えるのは性に合わん。やはり、斬ってから考えよう」
目の前に極上の飯。
据え膳食わずはなんとやら、だ。
戦闘に気をやったのを悟ったのか、構えを深くする少女。
さて、楽しませて貰えるといいのだが。

◇

隣に歩いていた呂布が突然、誰かがつけてきている気がする、と言ったのを聞いて、陳宮は呆れた声と表情を隠さなかった。
街中で急にそんな事を言いはじめた敬愛する少女に呆れた、のではなく、何者だかは知らないが、この洛陽で、よりによって”呂布奉先”によからぬ気を働く奴がいたという事に、だ。
尽善尽美英雄豪傑天下無双花紅柳緑たる、そんな存在のこの少女に、だ。
馬鹿も此処まで行くと凄く見える。そんな事を口に出しそうになったくらいだ。
珍しいと言えば、尾行になどすぐ気付くはずのこの少女が、気がする、などとぼかした言葉を使った事くらいだろうか。
もっとも、隠密に特化した偵察か、もしくは弱すぎて気配が紛れる存在か、と。そのぐらいにしか考えていなかった。
まぁ、いつまでもつけられるのも煩わしい限りである。人気を払い、いらぬ世話だろうが地の利を取れる場所を見繕い、足手まといにならぬように隠れて、そうすれば相対して数を数える暇もなく終わる。あとは当初の予定通り、ご飯を食べてご機嫌な呂布を眺めて癒される。

そうなる筈であった。

耳に剣戟が響く。
剣戟。
剣戟。剣戟剣戟剣戟剣戟剣戟——。
鉄同士がぶつかる度に火花が散り、それが幾度となく繰り返される。
なんだこの光景は、と陳宮は己の目を疑った。
目の前の男は名のある将には見えない。そういう輩は、武に才なき自分でも、全身に纏う気でわかってしまうものだ。
いや、たとえ名のある将だとしても、一対一で呂布と打ちあう猛者など、そうはいない。心当たりはいくらか挙げられるが、自分の知る

限りだとそれらは全員女である。
ならば、目の前の男はなんだ。
「ふむ、嬉しいぞ童よ。よくぞ此処まで防いでくれる」
「……」
楽しげに口を紡ぐ煌びやかな服装の男、佐々木小次郎。
対し、無言で油断なく相対する相手を捉えつづける呂布。
別に呂布が打ち負けてるわけではない、というのは陳宮の願望でもなんでもない。それはただの事実だ。
小次郎は呂布の力を真っ向に受けているのではなく、逸らし、いなしている。だから打ち合えているように見えているだけだ、と理解するのに時間を要した。
だが、逆に言えば、此処までこの男が立っている。その事に驚愕すら覚えていた。
「ハ――いやいや、此方もまともに打ち合えぬ死合い続きで恥ずかしいばかりだが、しかし許せ。なにしろこの長刀だ、打ち合えば折れるは必定。おぬしとしては力勝負こそが基本なのだろうが、こちらはそうはいかぬ。その長物と組み合い、力を競い合う事はできん」
また歪んでも堪らんゆえな、と続く言葉に、呂布は気にしていないとでも言うように首を振った。
しかし何処か戦いづらいのは事実だろう。
知らぬ武器、知らぬ技、戦ったことのない型とも呼べぬ型、尽くが見切りづらく、それがゆえに攻めあぐねている。
呂布が氣により尋常ではない贅力を発揮している事を、男が数度刃を重ねたことで気づいたのと同じように、小次郎の技量自体が高い事を、呂布は感じ取っていた。
だが。
それがどうしたというのだろうか。
「――!!」
「――ヌッ!?」
神速にして剛力たるその一撃に、初めて小次郎が驚愕の表情を浮かべた。

天性の感覚と、肉体、そして氣の才。
全てを兼ね揃えたゆえの最強であり、天下無双である。
技が凄い。力が自慢。ただそれだけの強者どもを幾度となく葬ってきた呂布が、今更その程度の存在に負けるわけがないのだ。
「いや、なるほど。セイバーは魔力でその力を出していたが、此処も同じようなものがあるのだな。だが――甘いな」
しかし陳宮が知るはずもないが、目の前にいるこの佐々木小次郎は、その剣技だけで英霊へと上り詰めた者である。
実戦経験こそ少ないものの、その磨き上げられた武は、その弱点を補って余りうる。
呂布の仕掛けた一撃を体躯の動き、剣先の技で払い、反撃として首を刈るために刃を振るう。
その刃を呂布は薄皮一枚で避け、全身をしならせ距離を取った。
その後も接戦と形容すべき死合いが続く。
呂布が風を叩き潰すような音を立てながら武器を振るい、それを躱す小次郎。
風を跳ね除け滑るような速度で小次郎が首を狙い、それを防ぐ呂布。
攻防が目紛しく変わり、路地裏には剣戟と風切り音が絶えず響いた。
しかし幾ばくかの時間が過ぎ、互いの実力が拮抗しているのを悟り、動いたのは小次郎であった。
「さて、このままいけば埒があきそうもない。私としては甘美な時間であるが――決めに行かせて貰うぞ」
小次郎は強者と死合うその時が好きだ。
目の前の少女は紛れもない強者であり、だからこそ勝った時の喜びを味わいたいとも思う。
ゆえに。
構えを取った。
「――――！」
この戦闘中、無形を貫いてきた小次郎が構えを見せたことにより、

呂布の警戒が高まる。
呂布も決まった構えを持っているわけではない。しかし、どういう風にすれば武器を振るいやすいか、力が乗せやすいかを覚え、それを行うに適した構えになる事がある。
つまり、相手の中でも自信のある技な事が察せられた。
「秘剣――――」
風が渦巻き、小次郎の刀に纏わりつく。
世界が徐々に重なり、ありえぬ何かが起ころうとしている感覚を持つ。
頭の中でそんな警報がなり――、
「――――燕返し」
神速の絶技が放たれた。

農民エンプロイメント

秘剣燕返し。
宝具を持たぬサーヴァント、佐々木小次郎が持つ剣技であり、かの騎士王すら認めた絶技である。
三つの刀剣が文字通り同時に襲いかかるという非常識で、魔法のようなその技は、事実として回避不可能な魔剣である。
驚くべきはそれがただの人間が辿り着いた剣技であるということだろうか。ゆえに、魔力供給のない今の小次郎でも問題なく放てたのである。
燕、いやＴＵ　ＢＡ　ＭＥを斬るために生涯を捧げ、完成したものの、ついぞ生きている間に振るわれることがなかったソレは、速度もさることながら、一人の人間に対し放つには過ぎた威力を放つ。
如何に呂布奉先という傑物だろうと、まともに受ければただでは済まない、どころか、絶命は確実だろう。
そう。
まともに受ければ、の話だが。
「――――ッ!!」
一筋の傷を負い、血が流れる腕を押さえながら呂布は荒れる息を吐く。
――――嫌な気配を感じ、ただがむしゃらに動いた。
呂布がした事と言えば、言葉にすればこれだけだ。
しかしその行動を、目の前の男が放った技に対して行うことのできる人間がどれほどいるかという話だ。
そこまで必死になったのは、受けたら死ぬというのがありありと感じられた剣技であったからである。
事実、これ迄にないほどの速度で動いた自覚が呂布にはあった。
それは常人であれば、視覚はおろか、初動を知ることすら困難であろう速度だ。
しかし、それでも避けきる事は出来なかったのだ。
少しでも遅ければ命までは最悪拾えたかもしれないが、腕の一本は

無くなっていただろう。
それだけの事を思わせる程の剣技であった。そもそも、誰も思わないだろう。
斬撃が二つ、同時に襲いくるなど。
「――――ふむ、避けられてしまったか」
残心を解いた小次郎がゆらり、と柳を思わせる動作で呂布の方へ振り向く。
「いや、確かに前例がある状況ではあったが。同じ事を繰り返す私も、まだまだという事だな――――だが、我が秘剣、よくぞ躱した」
呂布が知りうる事ではないが、本来燕返しとは三つの斬撃である。
頭上から股下までを断つ縦軸の「一の太刀」。
一の太刀を回避する対象の逃げ道を塞ぐ円の軌跡である「二の太刀」。
左右への離脱を阻む払い「三の太刀」。
しかしそれは、路地裏という足場の狭さから二本までしか打てず、呂布の持ち合わせる天性の直感とその状況が合わさった事により、結果彼女は今存命している。
「いやはや、まさか壁を走るとは。なんともまぁ、楽しませてくれる」
そう。
呂布は、唯一の逃げ場として壁を選んだのだ。
退路を塞がれ、横には壁。ならば、それを逃げ場にすればいい。
そんな考えを一瞬で思いつき、そしてそれを実行できるのが呂布奉先であった。
しかし、相手の自慢であろう技を避けたからと言って、気が緩むことはない。逆に、呂布の目から余裕が消えた。
無理な駆動を行ったことで痛む身体を気力で誤魔化し、目の前の男への戦意を高める。
今迄も別段手を抜いていた訳ではない。しかし一層気を引き締め、目の前の男に対する事を決めたのだ。
肌を焦がすような緊張感が走る。
二人が同時に動こうと足を動かし――――

「そこまでや！」
別の声が路地裏に響き渡った。
極限まで張り詰めた空気を針で突いたような声量に、二人は動きを止める。
「なんや、ねねのやつが慌てて呼びに来た思うたら、なにしてんねん恋」
はぁ、とため息をつく乱入者。
癖のある喋り方、サラシを巻き上に羽織を着ただけの女性に、呂布は声を掛けた。
「霞（しあ）……」
「はいはいそうや賢い可愛いオマケに強い霞さんですよーって、自分で言うのもなんや恥ずいもんやな」
そう言って口角をあげ不敵に笑う張遼。
その口調は軽く、しかし目線は小次郎から動く事は無かった。
「――――ほんで、そこの色男さんは恋の知り合いか？　随分とお熱いやりとりしとったようやけど」
「……知らない人」
首を振り、言葉少なに答える呂布。
その様子に小次郎は薄っすらと笑いを浮かべ、
「おや、そうつれない事を言ってくれるな。私は一目見た時から、お前に首ったけだというのに」
その歯の浮くような言葉にも聞こえる台詞に、恋はぴくりと肩を揺らし、霞は「あっは、」と声を漏らし、張遼を呼びにいき遅れて帰ってきた陳宮が、丁度それを聞いて顔を般若に変えた。
「――――!!!!　――――!!!!!」
「どうどう」
般若と化した陳宮が放送できない用語を連発し、張遼がそれを抑える。
なんともまぁ、気の抜けた空気になってしまったものだと、小次郎は小さく独りごち、刀をしまった。
状況を眺めていた呂布もそれを見て武器をしまう、とはいかないも

のの構えを解いた。
張遼は気の抜けたような、驚いたような顔をしながら、
「――なんや、突然襲い掛かってきた言うから叩きのめさんとあかんかと思ったら、随分大人しいやんか」
「そんな空気でも無かろう。なに、それなりに楽しませてもらい、満足した」
「そうかい、そうかい。――――そんなら、大人しく縄についてもらおか？」
張遼がそう言うと、彼女の後ろから数人の兵士が出てくる。
手には縄や捕具を持ち、油断なく小次郎を見据えている。
「――――は、せっかくの自由を得たというのに捕まれ、と？　それを拙者が受け入れるとでも？」
「受け入れれん、っていうならそれでもうちはかめへんで。嫌でも大人しくさせたるわ」
一触即発の空気であった。
兵士達は腰が引けそうになるのを懸命に堪え、目の前のやりとりを見守った。
張遼と小次郎はお互いに視線を合わせ、睨み合う。
しかし、それも長く続かなかった。
「――――ふ、冗談だ」
小次郎は軽く笑うと、身に纏っていた空気を四散させた。
「なんやねん。わかりづらいっちゅうねん……」
「言っただろう？　満足した、と。しかし気が昂っているのが尾を引いているのだ。許せ」
「もうええわ、ほら、はよ捕まえええや」
二転三転する状況に呆然としていた兵士達は慌てて小次郎を縄にかけ、連行する。
その際、その見慣れぬ武器を奪うのも忘れない。
「言えた口ではないが、大切に扱ってもらえぬか。それでも愛着があるのだ」
「ほんま余裕やな……安心せえ。そんな手荒には扱わんわ」

自分の心配より武器の心配をする小次郎に若干呆れながら、集団の先導をする張遼。
後ろに呂布と陳宮が続き、これで逃れる事は厳しくなった。
董卓軍の精鋭も精鋭たる将軍二人に連行され、これからの事を考えれば、並の者であれば恐怖に震えて歩くのも覚束ないだろう。
しかし当の本人はそんな状況を何処吹く風か、鼻歌混じりに歩いていく。
とりあえず詠の判断を仰ぐか、と頭を悩ませる張遼であった。

◇

「それで？　そこの馬鹿は何をやらかしてくれたの？」
「え、詠ちゃん……」
洛陽の宮にて、賈駆の開口一番がこれである。
口調からは苛立ちが隠しきれておらず、顔には疲労の色も見える。
慌てて諌める董卓も、何処か疲労を感じさせていた。
謁見の間にいるのは賈駆、董卓。
そして先程の状況を知る呂布、張遼、陳宮がいた。
華雄は話がややこしくなる可能性を危惧した軍師二人により呼ばれていない。反論はなかったことだけ記述しておく。
とにもかくにも、途中からといえ状況を理解し、取りまとめた張遼が賈駆に答えるべく口を開いた。
「いやな？　ねねの奴が慌てて走っていくやん？　事情を聞いたったら恋の奴が襲われてるっちゅーから、天下無双様に喧嘩売った身の程知らずが、地べた這いずってんの指差して笑いながら酒飲んだろと思ってな？」
「……兵士がこっそり街に出るアンタを見たって報告は本当だったのね。言いたいことはいくつかあるけど、とりあえず聞き流してあげるわ。それで？」
「は、ははは。堪忍してーや……。し、したら叩きのめされてるどころか、恋が傷負っとるやんか。これはあかんと思って慌てて止めて」

「止めて？」
「その相手を連れてきた」
「これが？　嘘つきなさいよ」
ぴしゃりと。
即答だった。
賈駆はため息をひとつつきながら、やれやれと首を振り、
「こんななよなよした軽薄そうな男が、恋に傷を？　つくならもう少し手を込んだ嘘をついてよね。ボクも暇じゃないんだから」
「随分な言われようでござるなぁ」
「発言を許可した覚えはないわよ。首切られたいの？」
そう低い声で言い睨みつける賈駆に、肩をすくめる小次郎。
機嫌は最低値のようだ。
「まったく、本当に暇じゃないんだからね。宦官の奴らは相変わらず気が抜けないし、袁紹の奴がキナ臭い動きをしてるっていうし、全部まとめて畑に撒き散らす肥料にしたいわ」
「たはは……詠ちゃん。抑えて抑えて…」
愚痴を零す心労の絶えない少女を、苦笑を発しながらまぁ、まぁ、と董卓が諌める。
落ち着くためにも深いため息をつき、しかし首を切る、とこの状況で言われたのにも関わらず、動揺一つ見せない男への警戒を密かに高める程度には冷静であった。
着ている物は上等。押収した武器は、比較的珍しい形状であった。
天の御使だとかいう噂話が流れているこの時期に、こんな怪しい奴が現れたという事は。
と、そこまで考えてから、その考えを追い払うように頭を振った。
いや、流石にないだろう。そうだとしても、張遼の話を信じるなら、こんなに血の気の多い人間が世を正すとか、無い。無いで欲しい。違っててください。
半ば祈るようになってしまったが、結論としては怪しい奴である。
相手が恋である、という点ではまだまだ信じられないが、出入り口を塞いでる当の本人の腕に治療の跡がある。

もしそれほどの武人であるならば、このキナくさい現状においては雇いたいものだ。
だが、それには幾つかはっきりとさせておかないといけない事がある。
「幾つか質問をするわ。？偽りなく答えなさい」
「ふむ。見目麗しい少女に訊ねられたのなら、何なりと答える所存よ。ちなみにお付き合いしている女人は募集中だ。そちらの藤の花のように可愛らしい其方も歓迎だぞ」
「死ね。もう死ね」
「これは手厳しい」
くくっ、と不敵に含み笑いをする男を睨みながら、この状況下でよくもまぁここまで軽口を叩けるものだと半ば賞賛した。
董卓は「へぅぅ」と顔を真っ赤にして俯いている。
さらに苛立ちが増した。
「まず、そうね。何処から来たのアンタ。洛陽の者には見えないけれど」
「此処から三日程の場所だ」
「そうじゃ無いわよ。普通何処の村の生まれとかあるじゃない」
「生憎、山暮らしでな。地名も学がない故わからん」
なるほど、と。
山で修行でもしていた武芸者か。
そう考えれば、常識外れな行動も納得はしないが、理解は出来た。
「まぁいいわ。恋に斬りかかったのはなんで？」
「目の前に馳走があったら、我慢できぬ性質でな。つい、味わってしまった」
「ああ、華雄とかと同じ奴か……」
つまるところ戦闘狂。身近なところでいうなら先ほど名前が口から漏れてしまった華雄。他に挙げるなら、最近名を聞くようになった曹操とかいう官僚の部下にいた筈だ。
こういう奴らは、道理より気合いで何事も押し通すから理解が及ばない。

だが、話してみると山暮らしと言うものの基本的な受け答えはできるし、あの恋と戦って五体満足なのだ。
怪しさこそ多分なものの、やはりこの強さ、ただ首を落とすのには惜しい。
他の軍の間諜の可能性？　それはないだろう。
そうだとして将の一人に斬りかかるなど目立ち過ぎだし、この駒を抱えたとして、そんな事をするよりかは戦場で使うだろう。
もっとも、諜報もできそうな雰囲気ではあるが。
しかし、こういう性質の奴らはやはり読みずらい。元々自分が軍師なこともあり、考え方が根本から違う事もある。
判断材料がいまいちだ。ならば、
「恋、直接戦ったっていうアンタに聞くわ。感じた事を教えてちょうだい」
「……」
「恋？」
反応しない事を不審に思い、もう一度声を掛ける。
すると、
「くぅ」
「なんで寝てんのよ!!」
「恋殿はお疲れなのですぞ！　静かにするのです！」
「黙りなさい恋限定無限甘やかし機」
信じられない。
自分に手傷を負わせるような男が、同じ空間にいるのにこの気の抜きよう。
大物なのか天然なのか、両方だった、とほのかに感じる頭痛を抑えながらため息をついた。
「霞、あんたから見てどう？」
「うぇえ!?　ウチかいな!?　ちゅうか本人の前で言えっちゅーんか……」
いきなりの方向転換に、張遼は乾いた笑いを一つ零した後、うーん、と悩み始める。

「そやなぁ、馬鹿やけど、悪いやつじゃない、って感じやな」
「その心は？」
「そりゃあ街中でいきなり喧嘩ふっかけたりとかするような奴やけども、捕まる時は口でなんやかんや言いながら結局潔かったし、根っこがどう見ても武人なんやもん。それだけわかれば、ウチとしては言う事はないわ」
ついでに、と続ける。
「あの呂布ちんが、あの有様や。害意が少しでもあるっちゅうなら、気は抜いても流石に寝る事はないやろ」
そうして張遼は、言うだけ言ったとばかりに、壁に背を預け目を瞑った。
なるほど、と思うと同時に、やはり完全に理解は出来そうになかった。
だが、まぁしかし、そういう考え方よりの人間から見れば其れなりに信用できる人間らしい。
何より、彼女らの勘ともいうべき感覚は時に侮れない。賈駆はあまりそういう考えを好まないが、自分達の将のものとなれば多少は認めることもできる。
やはり、ものは試しだ。
「一応、聞いてみるわね。アンタ、この軍に仕えてみる気はない？」
その言葉を聞いて、広間にいた将達は其々違った反応を示した。
一番わかりやすかったのは陳宮だ。
般若の顔が一瞬で浮かび、呪詛の言葉を放ち始めた。見なかったことにした。
次に張遼。
何かを考え付いたと言わんばかりの顔で此方を見てくる。嫌な予感しかしない。目を逸らしてやった。
呂布。
起きる気配はない。後で説教。
董卓はほんわかと、
「ああ、強い人が入ってくれるなら嬉しいですねぇ」

と言っていた。可愛かった。

◇

小次郎は、状況が二転三転とする流れに流されていた。

そもそも、街中で我慢できずに道行く少女に死合いをふっかけた時点で相当やってしまった感が溢れているので、もう後は野となれ山となれ精神で状況を静かに見守っていた。

途中で自身の内面を多少とはいえ見抜かれた時は、素直に感心し、同時に嬉しくも思ったものだ。

なんてことはない。自分など、武人らしさに未だ憧れを抱く、そこらの童と何も変わらないのだ。

そんな折にかけられた誘いに、さて、どうするかと思考を重ねた。

とは思うものの、断る理由もない。

何せこちとら一文無しの根無し草だ。

むしろ、このような怪しい者を引き入れるこの娘と、それに賛同するような空気がおかしいと思うのでござる。もちろん禍々しい呪詛の声のする人物からは目を逸らす。

というか、おかしいのは此処に女人、しかも少女と呼べる外見の人間しかいないということもそうである。

仮にも国、しかも城にいるのだから相応の身分なのだろうが、はて。とんと見当がつかない。

しかし、少女だからといって侮ることだけはしない。

何せ、目の前の緑髪の少女と、薄く蒼みがかかった髪の少女の二人は武人ではないだろうが、出入り口に佇む赤髪の少女は燕返しを避けた実力から言うことはなく、青髪の童は状況を読み、助けを呼ぶ判断を下した。紫髪の彼女も、ふざけたような雰囲気を纏いながらも、先ほどの眼力、油断ならない存在だろう。

彼女らが三国志を代表する武人であると聞かされても驚かないだろう。いや、実際そうなのかもしれない。

伝承というのはあれであやふやなものだ。

佐々木小次郎（架空の存在）という私がいるからには、武将が実は全員女であった、などということもあるだろう。あるだろうか。いや、騎士王も女であった。ありえるだろう。うむ。いややっぱないか流石に。

そう無理やり自分を納得させようとして失敗したところで、ちょうど良く緑髪の少女が口を開いた。

「黙り、ってことはあんまり乗り気じゃないわけ？」

「ん、ああ、いや。このような怪しい者を受け入れるその度量に感服していたまでよ。いやあ、とても真似できん」

「……喧嘩売ってるわけ？　まぁでも、それくらい此処も切羽詰まってると思ってくれていいわ」

「詠ちゃん……？」

随分と弱みを曝け出す友人を不審に思ったのか、隣の少女は困惑した声を出した。

ふむ。此処まで内情を話すということは、断った場合の処遇は想像に難くないだろう。

良くて牢の中。それより多少悪いだけで斬首だろう。

彼方はもう腹を決めたようだ。ならば私も決めなければならない。

とはいうものの、答えなど決まっている。無意味に引き延ばすのも時間の無駄だろう。

「あいわかった。三食寝床つきならば、其方らの軍門に降ろう」

こちらがそういうと、緑髪の少女は鼻を鳴らし、

「そう。賢明な判断ね。安心していいわ。この董卓軍、そんなみみっちいことはしないわよ。きちんと賃金も払うわ。働く奴になら、ね」

「はっはっは。ならば、私もそれに応えよう。なあに、取り扱いにさえ気をつけてもらえれば裏切りはせんよ。門番をさせる、とかな」

「……なんで門番？　ああいや、何があったのかは、まぁ聞かないでおいてあげるわ」

その雰囲気に、ふう、と。武将の其々が安堵のため息を吐いた。

小次郎は特に考えず了承したが、他の者からすれば此処で断られていたら、この男を処罰せねばならず、その場合も暴れないという保証はなかった。もっとも、無手の者に負けるなどとは思わないが、其れ

でも面倒ごとにならずにすんだことによる安堵である。
だが、既に霊体でなく、受肉している小次郎にとって、これからは食事や睡眠も必要になるだろう。それを確保できるのは重畳であった。
「宜しく……？」
「ああ、宜しく頼む……ああ、そうか。名は小次郎と呼んでくれればよい」
「……いいの？」
「なに、構わぬ。拙者の地域とこの大陸では、その名の扱いが少々違うものでな」
「……なら、こじろー、宜しく」
「うむ。宜しくで御座る」
真っ先に声をかけてきたのはいつの間に起きたのか赤髪の少女。そういえば、此方が名乗ったのはこの時代の風習であろう真名に当たるものしか名乗ってなかった。
しかし聖杯戦争などと欠片も関わりもなく、加えて別の風習が根付いてるところに、自分のは真名とは違う真名（しんめい）である、などという説明をするのも面倒だ。何より、馴染み深いものと似ておりながら決して違うものは受け入れがたいものだろう。故に少しばかり話を合わせておくことにした。
加えて、相手の名前すら聞いていない。
恋と呼ばれているのを何度か聞いているが、それは真名だろう。大切だというからには、取り扱いには気を使おうと思う。相手が此方を呼ぶのは構わないが、自分からそのような無粋な真似はしたくはないものだ。
「恋は、呂布。呂布、奉先」
「……うん？」
「いやあよろしゅうな！　ええと、まぁいいって言うんなら呼ばせてもらうで、こじろー！　うちは張遼！　よろしうなー！」
なんや変わった名前やなあと笑いかけて縄を外してくる張遼に、小次郎は、うん？　と傾げた首の角度を深くした。

「音々音は、陳宮ですぞ。ねねは、認めたわけじゃないですぞ……」
そう言いながら、呂布の後ろで唸る少女。
知っている名前の陳列、ただし性別が想像と違う、という事態に首がそろそろ九十度を超えそうである。
あっれ、本当に全員女子になってるのだろうかと、飲み込むのに数秒。

その後に続いた自己紹介で、白髪の少女が董卓だというのを聞き、苦虫を噛み潰したような声で「ええー？　ほんとにござるかぁ？」と発してしまうまで数秒であった。

農民ウォークアラウンド

「一応、アンタは食客って立場になるわ」
謁見の場から移り変わって、場所は賈駆の執務室。
資料室だと言われても信じられるほどの竹簡と本の山に、なんとか隙間を開けそこに置いたような机を挟んでの言葉だ。
「拙者、流石に兵を率いた経験とかないで御座るよ？」
「誰がアンタに兵まで預けるって言ったのよ馬鹿」
手厳しい。
この御仁、董卓殿にちょっかいかけた事をいたく気に入っておらず、対応がたまに刺々しい。
だがまぁ、この年頃の可憐な娘なら何をしても可愛いものだ。
女狐？　歳を考えろ。
「とりあえず当面は誰かの側に付けるから、状況に応じて戦ってくれていいわ」
「随分雑で御座るな……」
「しょうがないじゃない。ボクはまだアンタの実力を見たわけじゃないんだから。言っとくけど、明日あたり誰かと模擬試合してきちんと見せてもらうから。それの結果を、兵と一緒に突撃させるか、曲がりなりにも将として扱うかの分水嶺にさせてもらうわ」
ただ飯喰らいを置いとく余裕はない。そんな副音声が聞こえてきそうな声音であった。
苦笑しながら了承の意を示すと、話は終わりだと退室を促される。
用は終わったとばかりに手元に視線を落とす様を見ると、先程溢した忙しいという愚痴は正しく真実なようだ。なまじ優秀が過ぎる故、仕事を抱え込んでいるのだろう。もしくは、任せられる、信用できる人材に限りがあるのか。

……考えても詮なきことだ。刀を振るうしか能のない私では、手伝うこともできはしない。他の部分ではしっかり働いてやるつもりだが。

「ああ、そうだ賈駆殿。拙者の刀は今何処にあるか教えてはくれぬだろうか」

「かたな？　……ああ、アンタの持ってた武器ね。武器庫に運ばせた筈だから、誰かに案内させるわ」

それにしても、と賈駆が続ける。

「あの武器、見たことがないんだけど、何処で手に入れた物なの？　業物かどうかっていうのは、ボクにはわからないけど」

「なに、アレはそうあれかしと与えられた物であってな。想像に任せるとしよう。一つだけ言わせてもらうなら、それなりの業物だ」

限界の近いあの状況（セイバーと）での戦いでは歪ませてしまったが、平時ならそんな事はさせぬという自信がある。

もっとも、自分の好まない状況であろうが、それも含めての戦いだ。その時出せる最大の力がその時の実力である。たら、ればなどと意味もない。

そう考えれば、さぞや有名であろう聖剣と打ち合っても歪んだだけ、という点で見ればやはり、自慢してもいいくらいの業物だろう。

「ふぅん……素直に答える気はないのね」

「そう睨まれてもな。良い男というのは、謎が多いものと相場が決まって御座ろう？」

「死ねば？」

はっはっは。

手厳しい。

◇

しっしっ、と手で追い払われ、執務室を出た小次郎は、さて、と頭を悩ませた。

備中青江（物干し竿）が武器庫にある、とは聞いたが、場所がわからない。案内

をさせるなどと言っていたが、あの今にも仕事量的にも物理的にも埋もれそうな多忙さでどうするというのだろうか。
まぁ、幸いにして特にやることもない。
ぶらぶらと見て回るのも一興か、と歩き出してすぐ、見知った顔と遭遇した。
「ん？　おお！　こじろーやんけ！　どないしたんこんなところで」
快活そうな顔で笑い、小走りで寄ってくる彼女の手には、酒瓶が握られていた。見れば、顔も少し赤みがかかっている。
「おや、張遼殿。まだ日も沈みきらぬうちから酒盛りとは、随分とよい身分な事であるな」
「なんや硬い事言わんといてぇなぁ。自分もそういう性質（タチ）かいな？」
「は、いやいや。拙者も酒は好きで御座るよ。月に花にを愛でながら飲む酒はまた格別でな」
「おおう！　わかるやっちゃなぁ！　どうや？　今晩、親睦を深める為にもウチと飲まんか？」
「ほう」
「ん？　なんや？　ウチ相手やと不満か？」
そう挑発気に笑う張遼。
その誘いを聞き、数刻前には罪人であったような男を、直ぐに酒に誘うその行為に、微かに驚かされた。
きっと、彼女なりの歩み寄りなのだろう。
さばさばとした切り替えのよい性格は好むところだし、もちろん不服などない。むしろ、大歓迎だ。
「不満も何も、可憐な花に誘われては断れまいよ。今晩、楽しみにしておこう」
そう笑いかけると、少しぽかんとした顔をした後に、慌てふためき、その後蚊の鳴くような声で、
「ほ、ほうか。じ、じゃあまた後でな？」
と言ったと思うと小走りで視界から消えていった。
ふむ。
見た目の華麗さとは裏腹に、純粋な娘なのだろうか。

そう思考し、直ぐに小さく「あ、」と声をあげた。
「武器庫の場所を聞き損ねてしまったな」
まぁ、代わりに夜の楽しみが出来た事を喜ぶとしよう。

◇

そうして幾ばくか歩いていると、またもや知っている顔に遭遇した。
顔、とは言ったが、判別したのは服装と特徴のある赤い髪であった。
饅頭を食みながら、両手に料理のはみ出す紙袋をこれでもかというほど抱えているため、顔が中々わからなかったのだ。
もっとも、塔の如く積み重なった紙袋の数々を危なげなく持ちながら、しっかりとした足取りで歩いている時点で只者ではないのは感づいていた。
この少女、自分の平衡感覚と力を有効活用しすぎであろう。
「これは呂布殿。買い出しで御座るか？」
と、声をかけたところで、いやいや、と直ぐに心の中で首を振った。
国を守る武将の一角が食材の買い出しなどあり得ないだろう。そういうのは炊事係や雑用などの存在がやるはずだ。
そう思い、しかし口に出してしまったものは仕方ない。相手の返事を待つとしよう。
と、待っていると、
「……」
もぐもぐもぐ。
「……」
もぐもぐもぐ。
「……」
もぐもぐ……ごくん。
「……そう」
「いや長すぎであろう!?」
というか肯定されたで御座る!?

思わず少し声を荒げて言うと、当の呂布は首をこてん、と傾げ、
「食べ物は、しっかり噛まないと、駄目」
「ああ、うむ。そうで御座るな」
「口の中に物が入ったまま喋るのも、下品」
「うむ、うむ。言うとおりで御座る……ん？」
あれ、自分はそういう話をしていんだったっけか。
いや、ただ挨拶をしただけだったな。うむ。
どうにも、此方の調子が崩される少女である。
これが先程の威圧感を放っていた少々と同じ存在かと思うと、少々信じがたい。
だが、これがかの名高き三国無双の呂布奉先なのだというのだから驚きだ。
『ろぼっと』のようにただひたすら手を替え品を替え、敵を蹂躙する者を想像したのは何故なのだろう。いや。気のせいだろう。『ごっどふぉーす』などという単語も聞こえてない。気のせいだ。
「家族の、ごはん」
「そうか。大家族のようで御座るな」
なるほど、家族の分であるならば自分で買いに行くのも頷ける。
だが、この量を食べる家族というには、どれくらい多い人数なのだろう。もしかしたら彼女自身もそうだと予測できるが、大層な健啖家がいるのだろうか。
抱える量を見てそう思っていると、言葉少なな少女は一度頷き、片手で料理の塔を支え、もう片方の手で饅頭を差し出してきた。
「ん……」
「おお、かたじけない。よいのか？」
こくり、と了承の意を示す少女に、再度礼を言ってから口に運ぶ。
お近づきの印、ということだろうか。有難く頂くことにする。
一口食べ、中々の絶品であると舌鼓を打つ。
しかし、まぁ、なんだ。この時代での初めての食物であるが、拙者が生きていた時代より格段に味がいいのは何故だろう。
何か神秘でも働いているのだろうか。

女狐がいれば、そこらの事もわかったのだろうが、いたらいたで喧しそうだし、やはり居ないほうがよいな。
まぁ世の中こういうこともあるだろう、と思考を切り捨てる。
「馳走であった。重ねて礼を言おう」
「……ん」
本当に感情の読みづらい娘である。
戦いであっても、役に立つだろう。
と、このやり取りもいいのだが、目的の事を尋ねるとしよう。
「呂布殿。聞くが武器庫の場所を知らぬだろうか」
「……？」
「いやなに、拙者の刀がそこにあると聞いてな。しかし来たばかりでここの造りに詳しくない。賈駆殿は多忙であるし、張遼殿には聞きそびれてしまった。無論、呂布殿の用事が済んでからでいいのだが案内など頼めぬだろうか、とな」
そう言うと、少し考えた素振りを見せた後、
「ごはん、食べた後なら」
と、了承の意を得れた。

その後、家族と聞いて人間を想像していた小次郎は、呂布の家族に様々な洗礼（犬にもふもふしたり噛まれたり）を受けるのであった。

◇

天国と地獄を同時に味わったようであった、とだけ明記しておく。
家族と称する動物たちへと食料を与え、身軽になった呂布は、其れでも両手に紙袋を抱えており、暇さえあれば咀嚼で口を動かしている。まるでリスか何かのようだ。勿論ＲＩＳＵとかそういう話はしてない。
無言であることが常の呂布に、沈黙もまた良しとする自分という互いの性質的に、歩いている間何を話すわけでもなかったが、だからこ

そすんなりと武器庫に辿り着いた。
呂布がいたからか、特に滞りなく管理の兵から刀を渡され、定位置に背負い直す。
「……ちんきゅーと約束あるから、此処まで」
「ん、ああ、そういえば陳宮殿がおられなかったな」
あの様子では、四六時中ついて回っていてもおかしくないだろうに。
まぁ、利発そうな娘であったし、手伝いにでも駆り出されているのではと予想ができた。
「其れでは、助かった。礼はいずれさせてもらおう」
「ん」
呂布は、こくり、と一度頷き、空いている方の手を小さく振って別れを示してから歩いて行った。
さて、これからどうしようかと頭を悩ませる。
城を見て回る、というのもいいのだが、あまり一人で彷徨いて、迷ったり立ち入ってはいけないような場所に行ってしまうのも面倒だ。
しかしそうなると、暇を持て余してしまう。
「……賈駆殿は練兵場がある、と言っていたな。覗かせてもらうとしよう」
片隅でも貸して貰って、刀を振らせてもらえればよい暇つぶしになるのだが、と考え、人を見つけて尋ねるために歩き始める。

しばらくすると、一人の少女が此方に背を向け歩いているのを見つけた。
紫煙を思わせる色合いの軽鎧に、横に大胆に開いた『すかぁと』のような服装を組み合わせたその少女は、戦斧と槍とを合わせたような武器を片手に、静かに廊下を歩いていた。
あれ程重量のありそうな武器を持ちながらも、足取りは辛さを感じさせていない。
感じるのは平時でありながらほのかに感じるの荒々しい武の気。
――――この少女も、そこらの者とは一線を画しているな。

やはり武将なのだろうか。もしかしたら新入りたる自分が気安く言葉を交わしてはいけない存在かもしれないが、まぁ、今更か、という考えから声を掛けた。
「すまぬが、そこな少女よ」
「ん？」
振り向いたその顔は、やはりというかなんというか、美女に形容される部類だろう。やや吊り上がった目は意志の強さを感じさせた。
「少し尋ねたくてな。練兵場となるものがあるというが、どこにあるのか教えてはくれぬだろうか」
「……ああ、それなら私も今から向かうところだ。ついてくるといい」
「おお、かたじけない」
そう言うと、また背を向けて少女は歩き始める。
歩いている途中、此方をちらり、と一瞥し、
「見ない格好だが、何処の部隊だ？」
「いや、拙者新入りとでもいう立場でな。どこの部隊にもまだ属しておらぬ」
「そうか」
それだけ聞くと、また黙り歩みを続ける。
この感じる気は警戒、だろうか。
思えば、此れだけ大きな都を守る為の軍である。
先程の場にいた者が全ての将だったというのも考えにくいものだろう。
兵はまだしも、武将の一角に話が言ってないとか、まさかそんな。
だが、一応、確認してみた方が良いだろう。
「あー、少女よ。まだ聞いておらぬのかもだが――――」
「着いたぞ。ついてこい」
説明を続けようとしたが、遮られてしまった。
それどころか、練兵場に着いたのにまだ何処かに案内してくれようとしている。
ふむ、と頭を悩ませるが、見ると人気のないような場所に向かっているのを見て、まぁ、誤解でもされているなら解いてから鍛錬するか、

という楽観的な思考で後をついていく。

人目のない、周りを木々に囲まれた一角に着くと、少女は立ち止まった。

それに合わせ立ち止まり、辺りを見渡しながら、

「逢い引きの誘いなら、もっと堂々としてくれて良いのだぞ？」

そう笑いかけると、少女は武器を此方に向けた。

「逢い引き？　笑わせるな。此れから死に行くものに付き合う道理はないだろう」

「……ふむ、何故その思考に至ったか、教えてはくれぬだろうか」

「惚けるな！　脱獄犯め、のこのこと董卓軍の猛将が一人、この華雄の前に顔を表したのが運の尽きよ！」

「……」

脱獄犯。

それは牢などから逃げ出した者に本来使われるものなのだろうが、

「え？　拙者でござるか？」

「何を白々しい！　街中で呂布を斬りつけた奴の格好は兵の口から耳に入っているぞ。　ちょうど貴様のような格好だ！」

「まぁ、そうでござるな」

あっこれやっぱりちゃんと話通ってないやつでござる。

とは言っても斬りつけたのは事実である。

誤魔化すという選択肢もないので、そこは素直に肯定しておいた。

「衛兵が捕まえた、と聞いていたが隙を窺っていたのだろう？　何処の所属かは知らんが、まんまと私の策に嵌ったな」

「策」

「貴様が呂布に、曲がりなりにも傷をつけたと聞いた。他の兵では相手は厳しいだろう。故に、巻き込むことのない場所に誘導させてもらった」

どやっ、と擬音のつきそうな顔で胸を張る少女に、小次郎は苦笑を零した。

なるほど、確かに無用な犠牲を出させないために、一対一へと持ち

込めるこのような場所を選んだのだろう。
だが、しかし、
「いや、そのあとの話には続きがあって――――」
「敵の甘言には乗せられんぞ！　だいたい、私に対してあそこ迄気配を感じさせぬなどと、やはり危険な奴だ！　お前は私が斬る！」
「ええー」
また遮られた。
しかも話を聞かぬし、もしやバーサーカーの類か。
「さぁ構えろ。私も武人の端くれ、武器も抜いてない奴に襲いかかることはせん」
「はぁ。どうしたものだろうか、これは」
死合いは歓迎だが、相手はこれからの同僚。
殺し殺されができず、誤解を解かねばならない。
だが、まぁ、一度落ち着かないことには話も出来ぬ、か。
ため息をひとつ吐いてから、愛刀をゆっくりと引き抜いた。

農民ミスアンダーストウド

廊下にて見知らぬ男に声を掛けられた時、華雄は静かに驚愕をしていた。

自分も武人の端くれである。そこらの豪傑に勝るとも劣らない程度には、武を磨いているという自負もあった。

だが、まるで気がつかなかった。

後ろから声を掛けられるまで、その男がそこにいたことに。

ありえない、とまでは言わない。過ぎた自信はただの驕りと変わらないからだ。

しかし強い者なら隠していてもわかる剣気というか、そういう雰囲気がこの男から感じられなかった。

ならば弱いのか、と問われるとそんな筈はない、と断言できる。

ただ立っているだけだというのに隙がない。今切り込んだら、自分が獲物を振るう前に斬られるかもしれないとすら思わせられた。

つまりそれは、この者の間合いの寸前まで気づかなかった事に他ならない。

そして、その事実に対して感じたのは、陰に潜むような不気味さというよりも、月明かりが雲に遮られていたような、そんなどこか静かな違和感だった。

どちらにせよ怪しい者である。暗殺者、と言われてもどこか納得できるような、そんな雰囲気だ。

その風貌を見た時、つい先ほど兵から聞いた話を思い出した。なんでも、あの呂布が手傷を負ったという。

それを負わせた奴が、見慣れぬ羽織に、見慣れぬ武器の武芸者。確か、見たままこのような者ではなかっただろうか。

捕まったと聞いたが、何故ここに？　という思考は当然だった。そしてそれが、脱獄という単語に繋がるまでに余計な過程はなかった。

そこからの行動は早かった。

実力を加味し、人質などとを取れぬよう人が通りかかることのない

場所まで誘導し、後は叩き伏せるだけ。
その筈だった。

◇

木々が日の光を遮る薄暗い森の中。
轟音を響かせ風を切り、破砕音と共に地が砕ける。
男はそれを見て、おお、怖い怖い、と軽口を叩く。
それはつまり、華雄の戦斧が当たっていない、という事だ。
「この、貴様！　ちょこまかと動きおって、刃を合わせようと思わないのか！」
「いやいや、力は自慢できるほど持ち合わせていなくてな。其方と力比べなどとをしたら、すぐに弾かれてしまうだろう」
「ふん、自身の至らぬ部分をそうも恥ずかしげもなく言えるとはな。誇りがないのか？」
「はっはっは。私の剣に、力というものがあまり必要なかったというだけのことよ。安心するがいい。打ち合えはしなくても、首を落とす程度の筋力は持ち合わせているぞ」
「そういうのは、落としてから言うものだ――！」
「おっと」
華雄の暴れ猪のような突進を小次郎は半歩横に躱し、身をよじり避け、反撃としてふるわれた刀は、強引に振り回された戦斧に防がれる。
防ぐ、どころかそのまま武器を巻き込みかねない勢いに、馬鹿力め、と小次郎は心の中で悪態をついた。
「いやはや、まさに力技、という奴だな。荒々しさもここまでいくと恐れ入る」
「褒めても手は緩めぬぞ！」
「いや別に褒めた訳ではないのだが」
話が通じづらい。やはり狂戦士の類なのだろうか。
振るう武器は愚直とも言うほど真っ直ぐであり、力がこれでもかと込められている。

それに比べ、対人経験の浅い小次郎は、逸らし、躱し、首を刈るという呂布との戦いと同様の方針で華雄と相対していた。
――――流石に刈る、とまでいかなくても、峰打で意識は落とすつもりではある。
ところが、現在それに及ぶ事が出来ていない。
呂布が無駄のない破壊力だというのなら、此方は無駄のありすぎる破壊力だ。兎にも角にも力任せで、技量がない訳ではないが、それも荒々しいし粗く、大雑把だ。
だが、故に近づき辛く、戦り辛い事この上ない、と小次郎は思う。
誇る事ではないが、自分は耐久に自信がない。
黄金の鎧を纏ってなければ、命に予備などなく、死んで蘇る事などできはしない。故に、雑に言うなら一定以上の攻撃はどれもこれも喰らえば同じである。
呂布の攻撃も、この華雄と名乗った少女の攻撃も等しく、喰らえばただでは済まないのだから、呂布の無駄のなく鋭い剣筋の方が避けやすく楽、というのはある。
もっとも、それだけなら幾らでもどうにかなるだろう。
しかし、少女はこれからの同僚。故に殺すのを封じている今、その鈍りを抱えたまま相手にするのは難しい者であるのは確かだ。

「だいたい貴様、変な武器を使う上に、狙うところが狡く辛いぞ！　それでも武人か！」
「……ふむ。確かに大陸が違う故、ということもあるが、刀を見ることさえ初めてであろう？　私の剣筋は邪道でな、大抵の者はまず地に首を落とす。今は考えあってそうは振るっておらぬが、それでもここまで立ってる事。流石と思っておこう」
「何をごちゃごちゃと……！　あまり私を舐めるなよ！」
そう言って速度を上げる華雄。
だが、それでも攻撃は当たることがない。
そもそもの話、この男に速度で勝とうというのが愚かだと、そう言う人間は誰も此処には、いや、この世界にはいない。

サーヴァントにはステータスというものが設定されている。
それはその英霊が成し遂げた偉業であったり、その者に纏わる数々の伝説から決定される。
善悪を問わず武を持ち、それを振るい名を轟かせた者には筋力を。
戦場にて倒れず、奮起した者には耐久を。
速度に長け、険しき道を駆け抜けた者には敏捷を。
知恵と魔術に深い者はそれに相応しき魔力を。
試練を、戦場を、待ち得る自身の運命で打ち破った者には幸運を。
聖杯は、それらを加味し、サーヴァントに与える。
そして、もちろん華雄が知る事などないが、この『佐々木小次郎たれ』とされたこの無名の農民は、前述の通り耐久は低く、設定された筋力も英霊の中で下の中、といったところ。
だが、
ＴＵＢＡＭＥという幻想種――――もちろん本当に幻想種かどうかなどわからないが――――そう思われてもおかしくない存在を斬ろうと、その生涯を捧げた人間である。率直に言って馬鹿、と言っても過言ではないだろう。
しかし、そんな馬鹿だからこそ、この男は人の身でありながら神速の域に足を掛け、魔法とも言える絶技を生み出したのだ。
その敏捷は、とある戦争にて最速を誇る槍兵に、時として勝るほどの最高峰を誇る速度である。
故に、攻撃が当たらないのは当然の帰結だった。
「くっ……！　この……！」
「そら、息が上がってきているぞ？」
息を荒げ、汗を垂らす華雄に対し、小次郎の表情はまるで疲れを読み取ることができない。いや、本当に疲労を感じていないのかもしれない。
その事が、華雄を意地にさせた。
「っぉおおおお!!」
「――――ほう」
逆境で繰り出したその戦斧の速度は倍。威力は比例し、飛竜の顎す

ら砕くと思われるその一撃を見て、小次郎は感嘆の声を漏らした。
呂布もそうだが、今だ人の身で此処までの技を、力を振るえる彼女らに、小次郎は嬉しさを隠すことができない。
聖杯戦争に呼び出された時も、当初はくだらぬ遊戯に遣わされたと悲観したものだが、蓋を開ければ胸踊る猛者に出会うことができた。
そしてこの世界も、それに負けず劣らずの強者がいる事が保証され、しかも自分はつまらぬ縛りはなく、自由の身。
嬉しくないわけがなかった。
故に小次郎はこの目の前の少女に対して同僚だ、なんだ、という前に。
こんなくだらぬ諍いで命を取るなど、するはずもなかった。
「私の勝ちだな」
「――――っ」
首筋に突きつけられた、妖しく輝く切っ先を前に、華雄は動く事が出来なかった。
動けば首が斬られている、そんな自分の姿をどうしても幻視してしまい、そしてそれが目の前の男にとっては、赤子の手を捻るより簡単なことなのだと理解できてしまうからだ。
だが、それは動くのが無駄だということを悟っただけであり、死を恐れているわけではない。
故に、
「くっ……殺せ……」
「いやいや、殺さぬよ。元よりその為に尽力した。とりあえず、話を聞いてはもらえぬだろうか」
「敵の話など――」
「敗者が、勝者の言を聞く。これだけの話だが、それでも認められぬか？」
「……」
どこか武人の誇りを擽る言い方に、押し黙る華雄。
――こういう手合いには、効き目ありのようだな。
その姿に小次郎は密かにやれやれ、と嘆息し、これまでの説明を始

めた。

◇

「それで、誤解は解けたのね？」

「うむ。いや、話せば理解は早かった。早すぎて少し不安になったところだ」

夕刻。

華雄に説明をし、『賈駆達が認めたというなら大丈夫だろう！』と即座に了承と誤解の謝罪をされた小次郎は、多少の呆れを含ませながらも、部屋に戻るという華雄と別れた。

その後、人気（ひとけ）のない庭で素振りを行っていたところに、休憩を取った賈駆が通りかかり、先程の出来事を話していた、という状況だ。

「ややこしい事になるから、後で落ち着いてから伝えようと思ったのに、結局こうなるんだからうまくいかないものね。一応、ボクのほうからも謝っておくわ」

「なに、できれば次の機会には、なんのしがらみもなく剣を合わせたいものよ」

「これだからあんた達みたいな奴らは……」

「はっはっは、許せ。この性分は変えられそうもない」

頭痛がしそうな物言いに、溜息を吐く賈駆。

その様子に朗らかに笑いを返す。

「時に賈駆殿。食客の分際ではあるが、私に部屋などは与えられるのだろうか」

「ああ、そうね。城のはずれに使ってない部屋があるから、其処を使いなさい。言っておくけど、見張りは立たせてもらうわ」

「かたじけない。なに、見張りなどなくとも、裏切りなどせぬよ」

「……軍（ウチ）にと声をかけたのはボクだけど、それでもあんたは怪しいところ満載の奴なのよ。戦で武功の一つでも立てなきゃ、広く信用は得られないと思って頂戴」

「はは、承知、承知。武功を立てれば飯が食え、信用が得られると。いやぁ良いものだな！」

「ほんと、能天気というか、楽観的というか……」
賈駆にしてみれば『武功を立てられなければ、この先どうなるかもわからない』と、言外に脅したようなものなのに、この調子だ。
此奴の頭に不安に類した思考が浮かび上がることはあるのだろうか。
この男はもしかしたら死ぬ間際にも、自分を斬った相手に自分の血で相手を汚す訳には、とか思ってそうだ。いや勿論ただの想像だが。
流石にそこまでの大馬鹿はいないだろう。いたら、一周回って褒めてやるところだ。
「そういえば、張遼に酒に誘われたんですって？」
無駄な思考をやめて、話を変えることとした。
張遼も、この男と戦場で肩を並べる前に少しでも知っておこうということだろうか。
「うむ。いや、あれでなかなか初心というか、男慣れしてないのだな張遼殿は」
その前に一つ情報を取られているみたいだが。
「……まぁ、そうね。格好と言動で背伸びしてるけど、実際はそうでもないわよ」
「まぁ、あの年頃ならそういうものだろう。なに、可愛いものではないか」
此奴、山籠もりしていたとか言うくせにやけに知っている風な様子である。
しかし話す度に思うが、何処か此方の年齢を下に見過ぎているようなそんな風に感じるのは何故だろうか。特に歳を取っている風には見えないのだが。
どうにも、謎の多い男だ。
「でも、そうだとするなら夕餉を済ませておけば？　どうせ酒盛りなんだから、腹を満たすものなんて出てもつまみ程度でしょう？」
「ふむ、確かに。そうさせてもらおう。よい場所は存じているか？」
「いいわよ、案内ついでに、私が一緒に行くわ。ちょうどお腹も空いてたし」

「おお、ありがたい。ありがたいついでで申し訳ないが、少し頼み事がだな」
「……何よ」
そう言ってジトッと睨みつけると、小次郎は一瞬見惚れるような表情で――――
「――――金の無心をしてもよいか？」
「死ねば？」
もし、他に人がいれば、周辺の温度が下がったような感覚を覚えていただろう。
それくらい、賈駆の声は冷たかった。
「はっはっは。なにせ無一文でな。はっはっは」
「なんで笑えるのか、ほんと意味わかんない……」
そう言って賈駆は、本日何度目かの盛大な溜息をついたのであった。

農民ソークトゥ

賈駆は、目の前で拉麺を啜る男を見て考える。
思うのはまず、怪しい存在であるという事。
年齢、家柄、出身地が不明。
雰囲気は柔和でありながら、研ぎ澄まされた剣のような鋭さも感じ、掴みどころがまるでない。
しかし、その武力からどうしても欲しい存在でもあった。
賈駆はこれでも多方に渡って人を見てきた自負がある。
格好、訛り、ふとした際に出る習慣、地方による味付けの好み等、判別しようとすればどれかが引っかかると、食事にも連れてきた。
だが、どれも当てはまるものは無かった。
学がないというのは聞いている。品書きも自分が読んでやったくらいだ。
山籠りしていたというのだから、それはそうだろう。しかし、それにしては立ち振る舞いがそれらしくない。
覗こうとすればするほど、雲に隠れる月のように姿が見えなくなる。
「――そのような難しい顔で食べては、折角の料理も浮かばれぬだろうよ」
小次郎が空にした器を置きながらそう言った。
「……口にあったみたいね」
「うむ。初めて口にしたが、これは美味だな。山では肉と山菜などの単調食事しか無かった故、な。最近はまともに食事などしてなかった事も加えて、極上であったと言ってもいいだろう」
日常で食べているこちらの身としては、些か過剰な持ち上げだと思うが、まぁ農民の生まれで、山育ちなら確かに食べる機会もなかっただろう。加えて、無一文というなら空腹が続いていたのだろう。

しかし、これほどの腕ならすぐに日銭どころか、食うのに困らぬ程稼げそうなものだが。
「そういえば聞きたかったのだけれど」
今浮かんだ疑問を横に置き、炒飯を口に運んで咀嚼してから、なんでもないように問いかける。
「”天の御使い”という言葉を耳にした事はある？」
「ふむ……言葉遊びか何かか？」
少し考えてから首を傾げる小次郎の顔からは聞いた事がない事がありありと感じ取れる。
まぁ、そうか。その筈はないか。
この男が天の御使いであるなど。
見慣れぬ格好、何処か普通から逸脱した雰囲気、そしてほのかに神秘さをも感じるような感覚。
だが。
天の御使い、と言うにはあまりにも――
「知らないならいいわ。ちょっと町で噂になった程度の話よ」
「ほう？　そう言われると気になってしまうな。聞いてみたい、と言えば話せる類のものか？」
――――嫌に聡い男だ。
此方が言葉を選び、ぼかしながら喋っているのを見透かされている。
「……本当にただの噂よ。どっかの占い師が、天から人が降りてきて乱れた世を正すだろうとか、そんな感じの笑い話。天と言えば帝を指すこの時代で、そんな風に言えるその胆が羨ましいわ」
事実、賈駆もこの話をする際には気を使っている。
洛陽という帝の膝下で軽々と話せる内容ではなく、喧騒に紛れていることと、他国の怪しいものがいないか、護衛を数人おいての会話だ。
「ははぁ、なるほど。先程の質問は私が見慣れぬ風貌故に問われたものという事か。生憎だが、ここにいるのは唯の棒振りでな。天だなんだという肩書きは、荷が勝ちすぎる」
「ええ、だと思うわ。あんたが天の御使いだったら、戦を止めるために

兵士将軍を殺して止めるとかしかしなさそうよ」
「はっはっは。いくらなんでも、そのようなことはせぬよ。――まぁ、あの聖杯の影響を受けていればそういう考え方になっていたかも知れないが、な」
　後半の声は小さく、周りの喧騒に掻き消され、賈駆の耳にはとどかなかった。
「しかし、天の御使い、か。もしいるというのなら、一目見てみたいものだな」
「既にこの世界には降りたっているとかなんとかって話よ。もっとも、一から十まで与太話って可能性の方が高いけど」
「夢のない女子(おなご)よな。もし武の立つものであったら、手合わせを願いたいとか、そうは思わんのか」
「それはあんたみたいな馬鹿だけだと思うわ」
　呆れたため息を吐きながら、空の皿を遠くの方に置き、食事を終える。
　声に出さず、この男と会話をすると疲れるわね、と頭を揉みながら茶をひとくち口に含み――――
「か、賈駆様！」
　表の扉に配置した護衛が店の中に駆けきんできた。
　賈駆は耐えた。
　正直驚いたが、それでも耐えた。
　どころか口に含んだ茶を飲み込んでから、余裕そうにゆっくり振り返る事まで出来た。
「……騒がしいわね。どうしたっていうのよ」
　少し言葉が刺々しくなるのは仕方のないことだろう。
　しかし慌ててるものを見ていると落ち着くというか、冷めるというか。そんな感覚がある自覚があり、故に慌てる護衛とは対照的に、賈駆自身はやけに冷静だった。
「いい？　まず落ち着いて。誰が、何をしたか。もしかは何がどうしたか、それを簡潔に教えて」
「は！　え、袁紹家が檄文を各地に飛ばしました！　その報告と、内容

をお伝えに！」
おや、と賈駆は思った。
珍しい事もあるものだ。あの自分の富と名誉と美しさにしか興味がなさそうな者が、自分から行動を起こすとは。
もちろん嫌がらせに限っては積極的に動こうとするのだが。ただし人を動かそうとするという意味で。
しかし檄文、というからにはろくでもない内容だろうが、いかんせんあの袁紹だ。
どんな突飛な内容が来ても不思議ではない。
だが、
「そ。それで？」
それがどうした、という話である。
袁紹は強大な富（ちから）を持っている。だが、馬鹿だ。
繰り返すが馬鹿だ。
先も言ったように、そんな大それた動きができるというのならば見たいものである。
賈駆は内心鼻で笑い、茶を啜りながら続きを促した。
「な、内容としましては、その、要約すると反董卓連合の結成を集うものです！」
賈駆は茶を噴いた。
それはもう綺麗な虹が見えそうなくらい盛大に。
「な、な、なんですってー!?」
口を拭いながら席を蹴飛ばし立ち上がり、思わず大声を上げる。
周りの客も、その報告にざわつき始め、それを見た賈駆は声をひそめる。
「馬鹿だ馬鹿だと思っていたけど……いやでもあり得るといえばあり得る……」
「賈駆殿、賈駆殿。驚くのもいいが私にも何か言うことがあるだろう」
「なんだってそんな……ああいや、言ってても仕方ないわ。確かなの!?」
「確かです！　情報の入手が遅れていたこともあり、既に何名かの君

主は参加を表明している模様です！」
「こうしちゃいられないわ。すぐ城に戻るわよ！　貴方は先に戻って全武将を招集させといて！」
「はっ！」
「賈駆殿？　其方の対面にいた私の有様が水も滴るいい男になっているのだが」
「小次郎！　ボクは先に戻るわ。代金は置いとくから。じゃっ！」
「はっはっはっ。いい度胸でござるな此奴」
　後の話だが、賈駆は店を出るまで、小次郎を一度も見なかったという。

◆

　小次郎が軍議の間に入った時には、既に全員が揃っていた。
「遅いわよ！　何を悠長にしてたの！」
　一足先に戻っていた賈駆は、目くじらを立てて小次郎に言う。
　その言葉を受けた小次郎は肩をすくめて、
「いや、濡れたままで公の場に出るというのも気が引けてな。気持ちだが、乾かしてきたのだ、許せ」
「……まぁいいわ。それじゃあ、始めましょうか」
「私はよくないがな」
　賈駆はため息を吐く小次郎から目を逸らし、声を硬くして言う。
「――要点を言えば、反董卓連合なるものが結成されたわ」
　その言葉に場は騒ついた。
「それはまた、どうしてなんやろかー、なんて、惚けても状況は好転せんか」
　張遼はそう言って頭を揉む。

賈駆は一つ頷き、一瞬董卓の方へ申し訳なさそうに目を向ける。
「……ええ。今ボク達は、周りの群雄に比べ、帝の一番近しい場所にいると言っても過言じゃないわ。その実情がどうあれ、外から見れば嫉妬の対象ね」
「ほんまくだらん話や」
むなくそわるぅ、と顔を歪めて呟く張遼の横、呂布と挟まれる形に立つ陳宮は眉を顰めながら、
「それだけではないですぞ。今は黄巾の乱が平定され、よく言えば平和、群雄から言わせてみれば、名を上げる機会のない凪のような時期とも言えるのです。故に、大きな戦が起きれば――」
「――格好の餌、ってわけよ。妬み嫉みってのは袁紹の奴が主で、後はだいたい後者ね」
仕方のない事だ。
自分も、もし彼らの立場ならそうするだろうと、賈駆はそう思っている。
圧政だなんだと適当に並べ立て、人を集い、実際にそれを討つ。単純で、そうそう失敗もしない方法だ。
わかっていても大々的に止めるものはいないだろう。流れに逆らえば、砕かれるのは自分なのだから。

「さて、そろそろ次の話に行こうかしら。明るい話に出来れば良かったのだけれど、残念ながらもっとうんざりする話よ」
そう前置いてから、一枚の竹簡を広げる。
「報告によると敵の勢力は未知数。まぁ、最終的にはボク達の倍ではきかないでしょうね。加えて、各地の群雄が参戦するという事はそれだけ武勇に自信のある英傑達が集うという事よ」
「ふん。それがどうしたというのだ。有象無象がいくら集まろうと、この華雄の敵ではない」
「……華雄（バカ）は無視するわ。はっきり言って、戦力差は圧倒的を通り越して絶望的よ。逃げ出す者がいても、非難はしないわ」
この戦力差に加えて、十常寺の奴らをも警戒しなければならない。

絶望的、でも少々言葉が足りないだろうと思いながら、賈駆は董卓に目線を移す。
董卓は一つ頷き、
「今、詠ちゃんが言ったように、去る者は追いません。非難もしません。それだけ勝ち目のない戦いだという事は、私もわかっています。本当は、私の首を渡してそれで終わるのならいいのだけれど……」
悲愴の滲む、しかし本気さを感じる声音であった。
その言葉に賈駆が即座に返す。
「そんな事させないわ。次言ったら殴るからね」
「でも、詠ちゃんも、張遼さん達も、それに洛陽の人達まで巻き込みたくないし……」
「ボクの感情論を抜きにしたって、おとなしく首を捧げてはいおしまい、とはならないわ。次に来た奴が帝を傀儡にでもすれば、どちらにしろ洛陽は終わりよ」
その言葉を受け、董卓は俯き押し黙ってしまう。
その様子に、申し訳なさそうに目尻を下げ、すぐに直して張遼達へ向く。
どうする、という問い掛けを乗せたその視線を受けて、張遼が笑う。
「ま、逃げるっちゅーのはないな。絶望的やろうが、戦は最後までわからんもんや。月っちも好きやし、精々奮闘させてもらおか」
隣の華雄が頷く。
「ああ。まぁ私にかかれば朝飯前だ。大船に乗ったつもりでいるがいい」
「その自信は何処から湧くかわからないのですぞ……まぁ、恋殿がいればなんとかなりますぞ！」
「家族のごはんの恩、はたらく」
陳宮が胸を張り、その横で呂布は静かに頷く。
その光景に、董卓は顔を上げ、一瞬泣きそうな顔になり、数秒目を閉じる。
次に開いた時には、その目に覚悟の火を灯していた。
「ありがとう、みんな。頼らせて貰います」

そう言って頭を下げる董卓を満足気に見つめる賈駆。そして、すぐにその顔を引き締めた。
親友が足掻く覚悟を決めたのだ。自分も頑張らなければならない。
だが、その前に。
「……小次郎、あんたはどうするのよ」
壁に背を預け、目を瞑り黙っていた小次郎に声がかけられる。
呂布に傷をつけ、なおかつ五体満足でいるこの戦力を、できるなら手中に収めておきたい。だが、強硬な手に出るのを月は嫌うだろう。
どうでる、と思いながら小次郎を見ていると、閉じられた目が開いた。
目を開けると共に、表情を楽し気なものに変えたその雰囲気からは、緊張感というものが感じられなかった。
「――如何する、とは妙な事を聞く。無論、微力ではあるが助力を考えていたのだが」
気負いもせず。
なんの縁もゆかりもない筈の死地に、この男は軽々と歩を進めた。
「……そ。ならいいわ。運の悪い時期に入ってきたと思って諦めてちょうだい」
「運が悪い？　いやいや、誇る事ではないが私は幸運という面でいうなら多少、恵まれている方でな。確かに死活の危うい場面ではあるが――」
「――やはり私は、運がいい」
小次郎は、いつも通りの静音で、そう言い放った。
「……全く、呆れた奴だわ」
何度目かになるのか、この短期間で、何度も痛めさせられている頭を揉む。
だが。
各々の武将がこれだけ士気があり。
この未知数の男がここまで乗り気であってくれるなら。
最悪、月だけは逃がせるかもしれない。

「さぁ、時間はないわ。早速、対連合軍への準備へ取り掛かるわよ！」

そんな思いを表に出さぬよう、隠すように、賈駆は声を出した。

農民ブリッツ

「おーおー。これはまたうじゃうじゃと、よう集まったって感じやなぁ」

時は進み、場所は汜水関。

洛陽へ続く二つの関所、その一つ目の城壁の上で、太陽の陽を浴びながら張遼は誰に向けるでもなく言う。

「数がなんだというのだ。兵卒を幾ら並べようが、案山子とそう変わらん」

隣に立つ華雄が、その言葉を拾い、少し誇るような――擬音をつけるとしたら、どやっ、とでも付きそうな――顔でそう言う。

「まぁそうは言うてもそんな多く相手してたらどうしようもないっちゅーねん……華雄みたいな体力馬鹿はともかく」

「ん、何か言ったか」

「いいや？　なーんも」

張遼ははぐらかして、ひっそりとため息をつく。

確かに、華雄がそこらの者に易々と負けるとは思わないし、それは張遼だって同じだ。

しかし、数がそれを覆すのは変えようのない道理である。

加えて、此方と同等か、もしかしたらそれ以上の武将も混じっているのだろう。

敗戦濃厚。

いや、もはやこれは敗北が定められているのではないかと思えるほど、馬鹿馬鹿しくなる物量差だ。

その諦めに近い雰囲気は、軍の中にも漂っている。

それでもなんとか持っているのは、二つの堅牢を誇る要塞と、天下無双の存在。あと、こっぱずかしいから口には出さないが、自分らを

慕ってくれている兵士ばかりだからだろう。
まぁ、それに小さい要因として加えて言うなら――――
「結局、其方と呑むという話も、立ち合いの件も無くなってしまったな」
そこまで考えて、後ろからかけられたその声に思考が中断された。
脳裏に思い浮かべていた想像が、直に声をかけてきたのかと一瞬驚いたが、そんなことはおくびにも出さないように、努めて冷静に返す。
「そうやなぁ。全くもって慌ただしい話や。まぁ、呑むくらいやったら此処でも出来るやろ」
そう言ってから、振り返る。
その先には陣羽織を身に纏い、変わった長剣を背負う男が、表情に笑みを浮かべながら立っていた。
「ふ、確かにこの立派な城壁から月を愛でながら呑むというのも良いものか。何処もかしこも、何かしら風情に溢れているものだな、この世界は」
「世界とか、大げさなやっちゃなぁ。ああいや、山育ちからしたら、そんなもんなんか」
「……まぁ、そんなところだ」
小次郎がうっかりとこの時代、と言わなかったところは褒めて良いだろう。
冬木での時も、小次郎がもし自由に動ければ風情のある景色を探し歩けたのかもしれない。
しかし、そんなたらればも所詮想像でしかない。結局、最後まで柳洞寺から見える景色で自分を慰めていた。
ならば、直に観て、音を聴ける此方に、多様な風情に小次郎の胸が躍るのも仕方なしというものだ。
そんな内心を知らない張遼は、まぁいいか、と流し、
「もういっこの話の、試合っちゅーと、此処来る前に聞いたんやけど、華雄は一戦既にやってんねやろ？　どやったこじろーは？」
「うむ。強かったぞ。なにせ此方の攻撃が当たらんしな。当てれば一撃で持っていく自信はあったのだが」

「あっはっは。流石に私もあの攻撃を食らってタダで済むとは思わなかったぞ。まぁ、当たらなければどうということはない、といったところか」
「抜かせ。次は当ててやろう」
そう言う二人に悪感情はない。
卑怯な行動をあまり好まない華雄がこの態度ということは、この気弱そうな風貌に似合わず、単純に武技の競い合いで勝ったのだろうか。
確かに、城に連れて行く時に発した剣気は相当なものであったが、如何せん実力を自身で見てさえもいないので判断がつかない。
予定してた試合はそれを計るためでもあったのだが――、
「まぁ、直接できんもんは仕方ないわな。実戦の中で見せてもらうわ」
「ふむ、できないわけではなかろう？　この戦の後にでも出来るだろう」
「――――」
その発言は、つまり。
「――――勝つつもりなんか」
「無論。聞けば、名のある英傑が溢れんばかりだというではないか。それらと戦う際に勝つつもりがないなどと、無粋にも程があろう？故に私は、千や二千、万に届こうが、それ以上であろうが、全てを斬り伏せ乗り越えていくとしよう」

そうなんでもなさそうに、それが当然、やるべき事だとでもいうように、言い切った小次郎に、張遼は薄ら寒いものを背筋に感じた。
此奴は鬼だ。
このような状況にありながら勝つと、そう言い切るその精神。
それはもちろん、張遼とて負けるつもりで戦う事などない。
それでも、恐怖はあるし、実力差と物量とを推し量って無理な時は無理とも言う。そこの線引きを見誤らなかったからこそ、これまで生きてきたとすら思う。
だが。

恐怖を滲ませず、しかし傲るような様子でもなく。
唯々現実を見据え、それでもこの兵力差を、前座か何かのように超えていくとそう宣言する目の前の存在。
いったい、どんな人生を歩めばこのような、一振りの剣かなにかのような人間が出来上がるのか。
張遼には、想像ができなかった。
「ふむ……なるほど。そうだな。深く考えず、目の前の敵を全て斬れば解決ということだな。わかりやすい」
「華雄さん!?」
馬鹿な事を言い出した華雄に、思わず普段ならまず呼ばない呼び方をしてしまう。
「なんだ張遼。柄にもない呼び方をして」
「いやいやいやいや、まず共感できんと思っとったのに、隣の馬鹿が馬鹿な事言い出したらそりゃ柄もなんも無くなるわ！」
「馬鹿とはなんだ。私とて、なんの考えもなく言っているわけではないぞ」
「……その心は？」
「私の方が、奴らより強い」
「馬鹿や……」
先ほど浮かべたどやっ、と音がつきそうな顔でそう言い切る華雄に、張遼は頭を抑えながら呟く。
同じような事を言っているのだが、小次郎とはまた別の方に恐ろしい。
「ところで……彼奴ら、何故攻めてこぬ？　圧倒的な数なのだろう？
一思いに此方を叩き潰す気概で攻め立ててきてもおかしくないのではなかったのか？」
「まぁ、戦に出ない奴やったらそう思うわなぁ」
小次郎の首を傾げながらの言葉に、張遼はしょうがない、とでもいいそうな顔で返す。
確かにあれだけ強く、先程のような事を言えるのであれば、個での戦いは飽きるほど経験していそうだが、大群との経験はないだろう。

もっとも、個での戦いの経験すら少ないのだが張遼がそれを知る由もない。
「平地やろうと何やろうと、ともかく軍っちゅーのは多かれ少なかれ大所帯や。そうすると、もちろん一日で決着が付く方が少ないってのはわかるやろ？」
　黙って首を振る小次郎。それを見ながら張遼は続けた。
「平地ですらそれや。ほしたら、しんどさに輪をかけた城攻めなんかやったら、兵や将は何処で休めばええと思う？」
「……なるほど、陣を敷いているということか」
「ご名答や。ちゅーことで奴さんらは時間かけ過ぎて攻められたら笑えんから大慌て、とはいかんでもそれなりに急いで陣を敷いて、うちらはうちらで防衛の準備。せやから、今は嵐の前の静けさってところやな」
　まぁ、兵を率いてこんかったんならわからんでも仕方ないと思うで、と一言付け足す。
　馬鹿だ馬鹿だと馬鹿にしている華雄も、そこは頷いている。もっとも、この馬鹿の場合は感情で動きすぎるから型破りな部分が大きいのだが。
「ふむ。理解した。ならば私も何か手を貸した方が良いのだろうか」
「ああ、いや、準備ゆーてももう大部分は終わってて、後は詰めていくだけや。うちらはそろそろ戻るけど、こじろーは適当に休んでくれてええで」
「ん、よいのか」
「客将にそんなぽんぽん頼み事はせえへんよ。気にせず休んどき。始まってからがそりゃあもう、しんどいしな」
「うむ。休むのも仕事の内という奴だな。身体が疼くのはわかるが、来るべき時に温存しておくものだ」
「ほんま、そういうところはしっかりしてんな……これで戦術も覚えてくれたらなぁ」
「何か言ったか？」
「いいや？　もう諦めてるからええわ」

そんなやり取りをしている横で小次郎は顎に手を当て、何か思いついたかのように一つ頷いた。
「で、あるならば少し散策でも行って来るとしよう。地形などを見ておくのも良さげだ」
「おお、ええと思うで。ただ斥候なんかは出てるやろうから、気をつけな？」
「ふむ、そうだな。斥候には気をつけよう」
何か含みのある言い方であったが、まぁ、気をつけるというのだしいいだろう。そもそも、華雄に勝てるなら並の兵相手に後れをとる事も無いだろうが。
そう思って小次郎と別れ、城の中に戻る。

後に張遼は言った。
この時。この時に小次郎を無理にでも手伝いに駆り出していればと。
あんな馬鹿な真似を見過ごすことはなかったと。

◆

ここにいる佐々木小次郎は正直、この時代に来てから常時浮かれている。
理由はまぁ、色々あるが、例えば強敵がいる事。例えば自由の身な事。例えば見応えのある風景が溢れている事。挙げれば幾らかあるが、兎にも角にも、浮かれている自覚はあった。
故に羽目を外した真似に出る時も、まぁそれも一興かと自制が収まらない場合がある。
戦闘衝動もつまるところそれの一つである。
だから今、小次郎は敵の陣中にいる

理由を挙げるなら、名だたる英傑達の顔を一足先に見ておこう、といった好奇心からだろうか。加えていうならば、多くの陣営が参加するというのなら、天の御使というものも、もしかしたらいるかもしれないという考えがあり、あわよくば見ておこうと思ったからというのも一つだ。

まぁ、もちろん偵察紛いの事もしてみようというつもりもある。自身は暗殺者のクラスだ。ソレ(暗殺)をやるかどうかは置いておいて、気配を悟らせず、というのは得意だ。

そもそも、敵の陣中で大立ち回りなど、そうそうしたくもない――――いや、したくないわけではないが、勝手に行動して、勝手に死にました、では格好のつけようもないというものだ。

そんな言い訳めいた考えを頭の中に置いて、ふらりと歩く。

取って付けたような気配遮断スキルと、透化を合わせ、存在感を可能な限り希薄にした自分に、周りのものは気づかない。

無論、勘の良い者なら気づくだろうが――――今の所、平気なようだ。

そうして堂々と、しかし気をつけてしばらく歩くと、人影が少なくなってくる。如何やら陣の端の方へ来てしまったようだ。

やれやれ、無駄足かと後ろを振り返りかけ――――眼の端に人影を捉えた。

すぐさま近くの物陰に隠れると、声が聞こえてきた。

「愛紗(あいしゃ)、主を見なかったか？」

「ん、星(せい)か。いや、ご主人様なら見かけていないな。天幕の方にいると思うのだが、急ぎの用か？」

「いや、少々野暮用がな。なに、また後にするとしよう」

影から伺うと、少し離れた場所に二人の少女がいた。

艶やかな黒い髪を高めにまとめた少女と、少々際どい格好の少女は、両方共に遠目からでもわかるほどの美貌だ。

その手にはえものが握られており、この二人も戦う者なのだということを理解する。

――――本当に女子(おなご)ばかりなのだな。

少女達はそれなりどころか、やもすれば一級の武人だろう。そんな存在も、一見ただの可憐な花なのだから侮れない。
呼び合う名はきっと真名だろうことから、自身の知識にある武将かどうかは判別がつかない。
この少女達が誰かは分からないが――――主と呼ぶ存在には興味が湧いた。
名の知れた者である可能性がある。一戦、とは言わないが、一目見ておく価値はあるだろう。
そのためには彼女らの天幕に行かなければいけないのだが――――さて。
素直に聞いて答えてくれるならいいが、そうはいかないだろう。
故にこの内のどちらかが戻る際についていけばよいか、と考えをまとめ――――、

風を切る音に、横に飛んだ。

破砕音。

先ほどいた場所の地面は砕け、陰としていた荷物は目も当てられない惨状だ。
その光景を目に、襲撃者に声を掛ける。
「――――いやはや、今のは流石に肝を冷やしたぞ。何故わかった？」
「嫌な感じがしたから、殴ってみたのだ！　怪しい奴、何者なのだ！」
そう答えになってない答えを返しながら、武器を構える少女は小柄であった。
虎の髪飾りと、腹部を露出した服装。軽装であるが、なるほど。あの威力を出すために邪魔な物を取り払っているのだろうか。
横目に、破壊された場所をもう一度見る。最初は大型の鈍器か何かで攻撃されたのかと思ったが、あの長物の一撃で此処までできるものなのか、と感心すら覚える。
華雄殿と同じ、力自慢なのだろうと当たりをつける。

「鈴々（りんりん）！　今の音はお前か!?　何があった！」
「待て、愛紗！　誰かいるぞ」
先ほどの音で、先程の少女二人が駆けつけてくる。
このような明るい場所で、此方の存在を認識されては私の拙い気配遮断などないも同然だ。
此方に気づいた少女達は、今まで気配一つ無かった存在に対し、警戒を露わにする。
さて――――どうしたものか。
「……見れば、結構な武人とお見受けする。どこの陣営のものかは存じないが、正直に目的を話せば手荒な事はしないと誓おう」
黒髪の少女はそう言って武器を構え、油断なく此方を見据える。他の二人も、私を逃す気はないようだ。
「――――なに、聞けば各地の群雄が揃い踏みといいうではないか。ひとつ顔を拝見させてもらおうと思ってな。隠れていたのは許せ。美しいものを前にすると、口が回らんくてな」
「ふ、我々の前でそうも饒舌に喋る口が良く言えたものだ。所属はどこだ？　名は？」
槍を構えた少女は警戒を欠片も解かず問いかけてくる。
名、か。
答えてもいいが――――
「――――ふむ、そうだな。ひとつ余興をせぬか？」
「……余興？　何を言い出すかと思えば」
「まぁ、そう慌てるな。本当に唯の余興だ。そうだな――――私に一撃、一撃入れる度に一つずつ情報を開示していくことにしよう」
その言葉に、目の前の少女達は顔を顰める。
それもそうだろう。
わかりやすい挑発だ。
お前達の攻撃など、当たる訳がないと。そういう意味なのだと、目の前の少女達は気づくだろう。
別に、私の名など所詮紛い物。勿体振る価値もない。加えて、目の前の少女らを過小に評価しているわけではないが――――些か、根が

優しい考え方の武人達であるようだったので、焚き付けてみた。
セイバーがそうであったように、血に塗れた道を歩んでいても、気高き者であったり、心優しき者はいるのだ。それはその者の芯であり、仮に反転しようが、その残滓は何処かにこびりついて離れないだろう。
だからこそ、そういう優しき者は如何しても何処かで良心が出る。この挑発でそれを無くせる、とは露ほども思わないが――――死合いの流れに持ち込めたのなら、自分の譲れぬものの為に全力を出してくるだろう。
「さて、如何する？　私は此処で何も明かさず、自らの陣営に戻ってもいいのだが」
「それが出来るとでも？」
「出来ないとでも？」
青髪の少女の問いかけに、即座に返す。
少女らには残念ながら、私はこの者達を振りきれるだろう。
でなければ、燕に追いつくなどそもそも無理な話となってしまう。
「――――その余興、受けて立つとしよう」
「星!?」
青髪の少女が、少し妖しく、そして何処か獰猛な笑みで了承の意を返す。
「愛紗、この者は本気だ。そして、元より嘘をつこうという眼でもない。ならば逃すより、情報を一つずつ頂いていこうではないか」
「……もしかして、頭にきているのか？」
「少しだけ、な。我が神速の槍を前にして、追いつけぬだろう、などと自信満々に言われれば、誇りが目の前の者を捨て置けぬと吼えたてるのだ」
「鈴々は、取り敢えず取っちめておけばいいような感じがするので、星に賛成なのだ！」
「鈴々まで……はぁ、仕方ない。これから董卓軍と戦う前だというのに、仲間同士で何をやっているのか……」
小柄の少女も乗ったことにより、渋々と獲物を構える黒髪の少女。

話はまとまったようだ。
もっとも勘違いしているようだが――――私は一度も、自らの陣営が連合軍だとは言っていないのだがな。
それを教える様な詰まらない真似もしないが、な。
少女達が武器を構えたのに対して、自らも愛刀を鞘から滑らせる。
甲高い鋼の音が、空に消えていくような音色で響き、傾き始めた陽の光を浴びて輝く。
さて――――

「――――では、始めるとしよう」

農民トワイライト

陽が傾き、橙色の光が地面に反射し視界を照らす。
その黄昏に一筋の銀の線が混じり、風を切る音と、高い音が入り混じる。
先程から続くそれはつまり、刃が振るわれ、触れ合う音であり、依然その場に立つ者達の五体には傷一つ無い。
そう、英傑たる彼女らと対峙する、一人の男にも、である。
「――どうした？　その速さでは、私に傷をつけるなどと夢の中の話になってしまうぞ？」
「っ、抜かせ――――！」
そう趙雲が怒気を表しながら槍を振るう。
傷はない。しかし、その美貌に垂れる大粒の汗と険しい表情が、決して楽な戦いではない事を表している。
それでもそんな素振りを技に出すことはせず、神速とも言われるその言葉がままの如くかのような速度で男の額に迫った。
だが――――、
「ようし、こんなところか」
軽く言い放たれた言葉と、それに合わせたような軽い足取りで後ろに一歩跳ぶ。
すると、槍の穂先は小次郎の額と薄皮一枚のところで、ぴたり、と図ったかの様に止まった。
「――――」
趙雲は絶句した。
まただ。
先程から尽く躱されている。
首を取ろうと槍を払えば上半身を傾け避けられ、ならばと手数を増やし突けばそれも尽くを避けられる。
その避け方も最初こそ刃との間に充分な空間があったが、今では薄

皮一枚程度の隙間しかない。
まるでこの短時間で、此方の得物の長さが寸分違わず把握されているかのような――
「なに、そう驚くことでも無い。槍相手は初めてだが、元から見えている武器ならば、特段難しいことでもあるまい？」
そう何でもなさそうに言い放つ小次郎に、趙雲はぞっと背中に嫌な汗をかいた。
刃が潰れてない武器に対して、
実力の未知数な相手に対して、
実際の斬り合いの場で、
この趙雲が振るう槍に対して、
薄皮一枚で避けることが簡単？
何を言っているんだ此奴は。

これが一度や、大きく譲って二度までならただの戯言だと趙雲は聞き流していただろう。
だが。
此れ迄振るった槍のその尽くが、同じ避け方をされているという事実に、趙雲は恐怖を確かに感じたのだ。
「……まるで、見えない武器を持った相手と戦ったことがあるような口ぶりだな」
「うむ。使い手もさる事ながら、武器も相当であった。戦うのは歓迎だが、刃を打ち合わせるのはもう勘弁願いたいものだな」
これは戯言だろう。
趙雲は男の言葉をそう切り捨てた。
「しかし――――其処の二人は掛かって来ないのか？　いや、勿論これ程の武人と一対一というのも甘美だが、本気で捕らえるならばその方が確実であろう？」
小次郎は動かない趙雲を尻目に、少し離れた場所にて睨む二人に対して声を掛けた。

その言葉に、関羽は渋い表情で、
「……三人で相手している際に貴様が虚をついて逃げ出さないように、だ。それに、武人が多対一など、できるわけがなかろう」
「星が一撃当てたら交代しようかなと思ってたのだ」
張飛は続けてそう言ったが、関羽は内心で思う。
星が速度で負ける相手などそうそういないが――――この男は、数段上では無いだろうか。
もし、星が攻撃を当てれたとして、自分に当てれるのだろうか。
いや、そも――この男が逃走を選んだ時、果たして自分に捕らえることができるのだろうか――――
関羽は、この男の実力が自分達の遥か高みにあるのではないかと。
そんな想像を抱いた。
「なるほど、残念ではあるが、当然の考えだな。あいわかった。順に相手するとしよう」
そう言って小次郎は趙雲の方に姿勢を向ける。
「――――では、続きをするとしようか」

◆

小次郎は相対する眼の前の少女に対して、手加減、ではないにしても信条を一つ曲げて刃を交えていた。
それは一刀の元に首を狩る事――――即ち一撃必殺の刃を振るうのを抑えていた。
もちろん、此れが目の前の少女にとって良い気がする行いでないのは自覚している。
だが、言っては何だが、この少女は騎士王ほどの獲物ではない。
確かに疾い――――自分と対等とは言えない。

確かに技術はある――――まだ拙さが見える。
確かに膂力はある――――騎士王には及ばない。

聖杯戦争、及びこの世界を含めても、小次郎の戦った相手が、援護がある状態ではあったが名高い英霊達に続き、最優と呼ばれる英霊、その次に天下一と名高い武将という半ば人外のような連中との戦いということもあり、如何しても見劣りがしてしまう。此れならば、華雄と同等程度か、一回り上だろうか。

もっとも、この少女は人間だ。

英霊と比べるのは酷というものであり、この年齢でこの実力は驚愕に値する。

今この段階で見ても相当なものであり、更に此れからの伸び代もある。

名前もわからぬ相手だが、研鑽を積めばいずれは名を馳せる事ができるであろう才能。

――――今刈り取る果実でない事は明白だ。

故に、此れは自分の我儘だ。

驕りは剣を鈍らせるが――――それでも。

いつか、紛う事ない強者となったこの者と戦いたい。

その為だけに、小次郎は必殺の信条を封じ、出来うる限り不殺を心掛けていた。

だが、其れでも手を抜く、というわけではない。

手など抜けるほど器用ではないし、更に言うなら、この少女の体捌きに翻弄される事もある。

手を抜けば、其の隙を無様に蹂躙される事は想像に難くなかった。

「でりゃぁぁぁぁ!!」

「おっと」

像が残る程の連続突きを上体を反らし躱す。

先程から躱す処を見ている為か、その直後に少女は身体を沈ませ、足払いを行う。

だが、小次郎はそれを見てから数歩、後ろに下がり、地に這う少女

に刀を振るう。
一閃、二閃。
銀の輝きが順に走り、目の前の少女を襲う。
それを槍の腹で逸らされ、立ち上がった少女からの喉を狙った突きを躱す。伸びきった腕を辿り懐に入る。
驚愕の表情を浮かべる少女に対し、下段から刀を振るう。
槍という武具を持った少女に、懐での攻撃を防ぐ術はなく、その体躯から鮮血が舞う――――事はなかった。

「――――其方らのような者ならこうしてくれると期待していたが、さて」

振るった刀は、鉄が合わさった音を立てて止められている。
目の前の水色髪の少女の武器はまだ戻っていない。
なら、答えはひとつしかない。
「でぇりゃあああああ!!!」
黒髪の少女はそう咆哮を上げ、力任せに武器を振り抜く。
その細腕からは想像できない怪力に、小次郎は鍔迫りをやめ、後方に下がった。
「愛紗！」
「すまない、手を出すつもりは無かったが――――つい、身体が動いた」
「……いや、私の未熟さが元だ。すまない、助かった」
青髪の少女は悔しさを噛み殺したかの様な顔で礼をいい、黒髪の少女はそれに対し申し訳なさそうな顔で受け、その後此方に顔を向けた。
「――――貴様にも、申し訳ない事をした。すまない」
「なに、謝る必要はない。元から三対一と言い出したのは此方で、其方らは矜持に則った相対をしていただけのこと。横槍とは思わんよ」
何しろ、半分狙った様なものだ。
一対一も甘美ではあったが、元々は此方が吐いた唾だ。
元より不審な者に対し、数で掛かるが普通のところを一騎討ちとい

う形にしてくれた。
甘い、とそう言う者もいるだろうが――ただの棒振りからすれば、そんな在り方に少しばかりの憧れを抱く。
「さて、では三対一ということで改めて仕切り直し、といこうか。じきに日も沈みきる。此方から提案しておいてなんだが、私も無断でこのような行動に出ているようなものでな。あまり遅くなっては叱られてしまう」
元々は目的が達せずとも、少しばかりちょっかいをかけて満足すれば帰るつもりであった。
しかし、ただ一人の少女にこれほど魅せられるとは思わなかった。
やはり、この世界は素晴らしい。
「――三対一、と言ったな」
黒髪の少女が静かにそう言った。
それに対し、頷き言葉を返す。
「勿論。男子たるもの、二言はない」
「そうか。一人に対し複数で掛かる事を良しとされるなど、舐められてたものだと思ったが――許してほしい。舐めていたのは此方のようだ」

その瞬間。

後ろから、風を力任せに切る音がした。

「――!」

それは、先ほどの焼増しのようであった。
此方を真剣な表情で睨む小柄な少女。
遥か遠くまで届いたであろう破砕音。火薬が爆発したかのような窪み。
そして、それを躱す自分。
気配を薄め、肉薄し、叩き潰す。

まるで野生の獣のようだ。
その俊敏さ、隠密性は、曲がりなりにも暗殺者として呼ばれた私に迫るものが感じられた。
もちろん荒々しさがもう少し隠せれば、だが。
「は、奇襲か。もちろんこれを卑怯などとは言わぬが、さて、次に続かなければ意味が――――っ！」
後ろに跳んで躱した先。
それはつまり先ほどの二人がいる場所で。
「おぉぉぉぉぉぉ!!」
「でぇりゃぁぁぁぁぁぁ!!」
此方に言われるまでもなく、彼女らは向かってきていた。
研ぎ澄まされた突き。
洗練された一閃。
その二つが、眼前に。

「――――成る程、見事」

橙色の地面に、赤い雫が舞った。